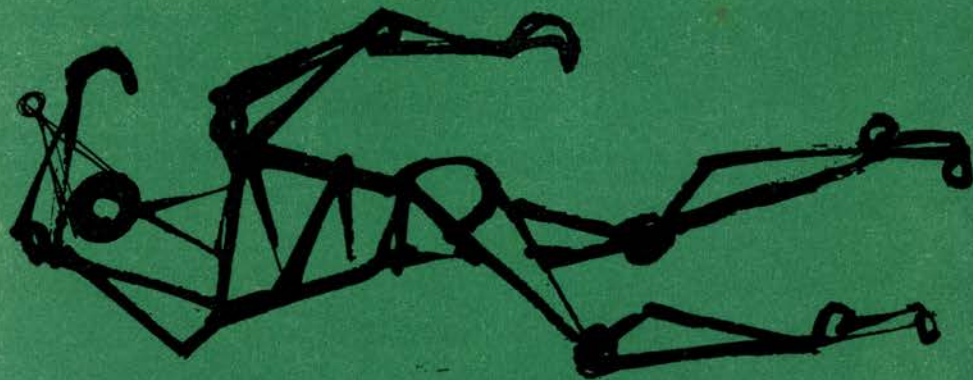


川柳の雑記

麻生路郎☆主筆



nohri,

三月號

No. 382

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

— 4 月本社句会 —

反 身 櫻 祝
省 分

兼題

川柳雑誌社主催

本社三月句会

道アラの新名物ノ

川雑の句会が道頓堀へノ

どうとんぼり 文楽座別館四階

ゼヒ柳友お誘いの上へ出席ください。

日時 三月七日(土) 午後六時
場所 文楽座別館四階

市電道頓堀電停南へ二〇米西側
市電日本橋二丁目電停北へ百米西側
(入口は右側から階段を上ってください)

兼題 「商才」 (三句) 麻生路郎選
(この分は切六時半終了)

「フアッ」 (三句) 土井文蝶選

「おもわく」 (三句) 市場没食子選

「職探し」 (三句) 戸田古方選

席題 三題(当日発表)
柳話 中島生々庵

呈賞 ☆各題天位 ☆路郎選天位に不朽洞賞
会費 百円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸佑・狂二・
与呂志・白水・木堂・月都・薫風子・水断・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円
同封(切毎月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉 六〇八一

日本盛酒坊

和やかに ます一杯

灘の清酒

ニホンサカリ



東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・南九郎右衛門町に
(近日開店)

義談口窓



ゲームセッとしたらどうだい

たたかれて泣く女と、
たたかれてよろこぶ女があるように、動評されることに反抗する教員と歓迎する教員とがいるのではあるまいか。フトそんなことを思った。そんな馬鹿なことがと、ハチ巻血眼で反対闘争をしている人達から叱られそうだが、あながちハチ巻組が考えたり行動したりしていることだけが正しいとも云えないのではないか。

人権を無視して呉れるなど血みどろになって休戦闘争をするのであろうか。
まあ、そんな時でも、私はレジスタンスをするよという人達は御自由だが、一方には動評によって、平素の私達の努力を買っていただいて有難う。動評様様、校長様様という教員もいるのではなからうか。
私は動評をして貰う方が有難いのだが、労組から、仲間外れとして扱われるのが怖いので、ハチ巻組の尻にくっついていられるのだという教員もかなりいるような気がする。若し、そんな教員がいるとすれば労組は労組という縄で、そんな教員達の自由を束縛することにな

ると思うが、どんなものであろう。一方が動評反対の交渉の自由を持つのであれば他方にも交渉に応じない自由はある筈である。限度を越えた交渉はむしろ応じないのがいいのではないかな。最近の新聞を見ると、交渉の強要で入院したり、校長が板ばさみにあつて宿屋に雲隠れしたりしているというところであるが、交渉を深夜に強要するような教員達に、日目の教育が完全に行われているとは思像出来ないし、雲隠れして校長の任務がこれ又完全に果たされているとは思えない。

選者とを脱み合せて作句すればいいのである。全部の題を作ろうと、全部の題を作らないで選別の結果を聴くだけにしよう、それは作家の自由である。
一定の時間が来ると締切られ、選者によって選別されてその優秀句を天地人だとか五客だとか平抜きだとか、ある階級をつけて発表する。この場合、選者に句の生殺与奪の権が与えられているので、没になったからという選者を恨むようなことはしないのである。
没になった作家で、中にはあの選者は眼がない。オレの作品が判らないのだとひそかにいたりすることもある。あつても大びらに反抗闘争はやらない。その点川柳作家は紳士的である。しかし、ここに見通してはならないことは選者の権限で句に対して動評式な選別を行うが、作家も又、あの選者には出句をしないと選者を選別する自由が与えられていることである。従って川柳の会にはハチ巻闘争も見られないし、ボリさんに御苦勞をかけるということもない。

— 路郎 —

三月号目次

題 字	麻生 路郎
表 紙	野 尻 弘
ゲームセッとしたらどうだい	麻生 路郎
入選の條件	腹乃・生々庵
川柳歳時記	太谷 竹莊
好きな小鳥	山川 阿茶
新川柳鑑賞	麻生 路郎
方言と川柳	東野 大八
川柳ルポ宝塚映画訪問	尼 縁之助
大万川柳あれこれ	須崎 豆秋
養子開門	松江 梅里
女ばかりの川柳大会	東野 大八
痴人の柳信	川島葉乙女
平 将門	木山 遠二
不朽洞の人々	富士野鞍馬
雅号由来記	久米雄氏の巻
「にしなり」漫評	佐野 卜占
4Sの世に	堀口 塊人
私の念願	三栗 夜城
★	杉本 一鶴
川 柳 塔	麻生路郎選
同舟近詠	諸 家
近作柳緯	北川春雄選
一路集	土井文蝶選
金 泥	大鶴喜由選
入 門 講 座	田垣方大選
研究題	麻生路郎選
各地柳壇	戸田 古方
不朽洞会から	古方
柳界展望	古方
青ペン・赤ペン	古方
周辺雑感	古方



豊中市 戸田 古方

まごころをこめて封建的になり

ゆたんぼの底に値札をはったまま

酒や酒またもわからんままかえり

大阪市 土井 文蝶

税務署が何恐かろう酔うて居る

秋の夜は長いもんだよ飲みましよう

ハンストで先生あわれ瘦せ給い

なんとなく二人で居たい雨が降り

西宮市 若本 多久志

商売臭みせたお医者信じ兼ね

鉄筋に改築してもパチンコ屋

口説いては見たが子があり妻があり

大阪市 正本 水客

差し上げた子は太陽のなかにあり

寝正月でしたと会う人会う人に

もう酒が切れて了うて去のとせず

大阪市 丸尾 潮花

揺ひいて男をたたく手も覚え

兵庫県 小西 無鬼

実父九十才にて逝く

親の亡い実家が他人めいて来る

両タ親をもうまぼろしで追う許り

大阪市 西 いわを

抜けがらのような女と相乗りし

だからだからと話は纏らず

割り切つて女の瞳うごかない

堺市 八木 摩天郎

反主流のように女房は桶をつき

去られても泣くな泣くなと父は泣き

ホノルル市 故内 藤草 一郎

悲しくも嬉しや形見の靴が合い

退院を止めりゃ浮気ともうひがみ

青春を忘れて貯めはしたもの

東京都 宮田 不二

賀状書くスピード落し思うこと

去る三日ハハーンあそこへ忘れて来

アルサロの間口は狭いものに見せ

笑顔を聞えば一人子が尋一だ

ホノルル市 白砂 旋風

皇太子惚れて通うに番がつき

ワイマル 羽佐 周柳 葉

自給さえ出来ずに権利主張する

豊中市 福田 安夢

信号を無視した犬よ憐れるな

溜息をつめた風船ふくらんだ

クリスマス・イブつまらん男に処女をやり

消しゴムに似たり働きすりへって

奈良県 尾崎 方正

断わりの手紙を追うて娘の電話

馬鹿正直と云われた俺が長く生き

堺市 吉田 圭井 堂

メートルに直す間横へよらされる

永らえばグラムで云えと情けなし

家内より娘が恐い二日酔

防府市 長野 井蛙

手錠にも良心マフラでライト避け

六十の青年などと髪を染め

岡山県 直原 七面 山

五十年恋一つなく来た空ろ

赤線地帯の説明にママ煩を染め

鳥取市 河村 日満

初笑いストでおどかす顔でなし

候補者の酒も合わせて飲み潰れ

窓の中だけの景色へ積る雪

下関市 石川 侃流 洞

ショートスカート向いの席が困らされ

エキストラ斬られた順から飯を喰い

倉敷市 木村 千容



正席は函の浮くような世辞をいい

掛け声が残業調になりけり

設計へ忠実すぎて土工ふて

會敷市 田垣方大

制服でない娘を思い出せぬなり

妹が突然できる父の過去

麻雀が家族で出来るようになり

パフ叩き叩き戸締りさしずする

加賀市 野村味平

ふるさとはいいもの二階住いでも

無法松のラストへ涙さそうなり

鼻声で仲居も唄う枯れすすき

大阪市 木村水堂

女房に口説かれてするお仲人

仲人も養子と知って委せられ

元日も勤める父がものたらず

香林氏表彰さる

彰状を渡す恩師も涙ぐみ

高槻市 福田丁路

心胆を寒からしめたストリップ

判決の死刑に異議のない目礼

空ッ風まともに受けた地藏尊

永遠の愛を気軽に誓うとき

東大を目指し青春すり減らし

大阪市 真鍋一瓢

紅厚き唇はよちよち食う如し

大阪市 後藤梅志

京都らしい老舗で七味唐がらし

呉れというのでやった娘にけちをつけ

春をまつ小鳥の動作みていたり

米子市 小西雄々

民謡を聞けばここらは米どころ

愛想もつきた政治屋の政治

新妻の腕を助ける味の素

赤胴が勝って安心した寝顔

大阪市 吾郷玲人

炬燵から誰方ですかとマッサージ

税務署に聴えまんがと高笑い

奥さんになつても茶目気のある賀状

大臣の墓参選挙が近くなり

大阪市 山川阿茶

麻雀で旦那来ぬ日を稼いでい

卦たててあんな人は人が好すぎます

葬式に来て茶柱が立つ茶碗

大阪市 金井文秋

養老院へも行かず市電の切符売る

子沢山みんな笑うて羨まれ

クイズ狂運根拠を教えにし

小松市 伊藤茶仏

大雪をみに来た客と歩かされ

清潔な老婦にお辞儀して通り

加賀市 那谷光郎

ハンカチに欠伸包めば去に支度

処世訓妻に聞える声で読み

大阪市 北川春巢

すき焼きのにおい二階も下りて来る

病院へ景気よう薬屋から初荷

うすいとは云わず帽子を妻すすめ

入院をしていて法事思い出し

岡山県 浜田久米雄

二人とも銀婚式の日を忘れ

選挙だけ偉大な力発揮して

検討をするとはずるい逃げ言葉

岡山市 逸見灯竿

先約を妻がしていてあわてさせ

おとなしい喧嘩女は睨み合い

霧這うや我が足音を消す如く

大阪市 武部香林

元旦の騒音旗の釘をうち

仁丹がバラバラ妻を呼び立てる

大阪市 木下幽王

節つけて読むおばあちゃんもういない

悪筆三代血統の正しさよ

大阪市 水谷竹莊

出るとこへ出て話そうとけんたい期



鳥取市 杉谷湖山

年期を入れた腕だが年の争えず

年賀状昔の型に書き終り

京都市 大鶴喜由

マフラーを掌で温めて母渡し

居直ってその理を攻めるハイティーン

恋はいらんかなと女二十五過ぎ

ハンサムに近寄るでだて案じさせ

尼崎市 小林文月

休日は電車混む様な混まぬ様な

大阪市 富岡淡舟

調べ室うどんの鉢が隅にあり

呉市 林野甦光

気安さの話題がいつも儲からず

岡山県 福島鉄児

銀婚へ金は溜めたが子が居らず

襷でも取って酌でもせんかいな

岡山市 服部十九平

憲法をたてに役所を手古摺らせ

爪を噛む癖が見合いの席でも出

岡山県 大森娛句楽

混雑を苦にする旅の人となり

今日も又広告料をゆすられる

正月も時計変わった音でなし

兵庫県 若林草右

長がつき見覚えのない賀状が来

末っ子の服は地面を這回り

叱られて叱って越した年の暮

豊中市 足立春雄

牛が草噛む様にガム噛む女

ミサイルが飛ぶと云うのに初詣

熊本市 有働菜春

心配なもの年頃の美しさ

騙されてやろやと親の嘘見抜き

おしるこが三つ女の姦しい

大阪市 山本葉光

今年から出直す若さまだ捨てず

明治の名士の死去の小記事

倉敷市 水谷谷水

都々逸で妬くとは遊び馴れたもの

未亡人の自由を不倫の邪恋のと

倉敷市 梶原一善

変骨で通せばわずらわしく無くて

石橋をたたいて又も失恋し

岡山県 田村藤波

大雨になったに借金取が来た

スリでさえ休む気になる三カ日

岡山県 岡田夜潮

能面に似たお化粧ですましとり

つづら坂清水見つけて尻を立て

茨木市 下山清潮

反省をするも元旦ねたまんま

貧乏は六十一年続いと

晩酌がおいしくなった宵えびす

岡山県 本田恵二朗

さすが姉失恋の方ももう済ませ

東宮さん妬かれておわすとも知らず

京都市 松川杜的

サーカスの象も見ている京の雨

三等が好きです文士の旅日記

鳥取市 森本法泉子

妻はよし正月用の割ぼう着

尼崎市 藤井春日

一坪で食って行けるも大阪か

暴力一掃宣伝抜きでやって欲し

岡山市 津田麦太楼

かりがねを淹れて夜長の老夫婦

老の風呂水埋めさしてまた焚かし

吹田市 橋本幸男

屠蘇気げん父も出て来てフラフラ

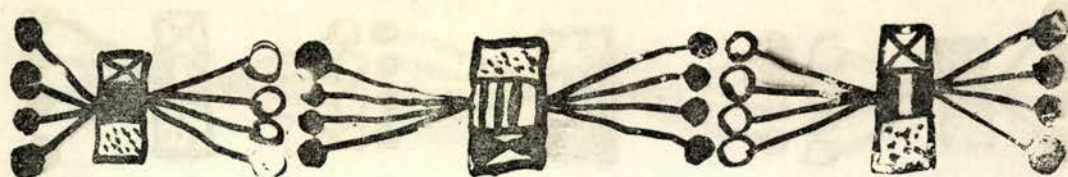
母死亡

編物を半分残して母は死す

堺市 高崎雄声

十二月普請のできるよい暮し

島根県 藤井明朗



つり合わぬ縁持久戦に入る

縁は異なるもの再婚して解り

ああ我れも髪にも白髪見つけたり

岡山県 永松 東岸

招き猫の塵払うてる暇な店

恩のある人の不遇を聞く師走

倉敷市 野田 素身郎

共稼ぎ妻は下りの汽車に乗り

こう言うておけと新婚教えられ

大阪市 木村 十悟

掌へる姉となり南無阿弥陀

たむろして明日のない人何か食べ

七七日誰も泣かない顔で寄り

住めば都犯罪の街もよし

大阪市 伊達 堰子

へんくつで通せた内助知りもせず

絶対に洩らんガードの下へ越し

寒けたつものに机のわが入歯

大阪市 不二田 一三夫

アリランを故国にもってグレている

節操をまげない足袋の右左

妻五十おかめのよさがわかりかけ

兵庫県 酒井 ひか平

初出勤この靴音の無事であれ

今年こそ何かやりそな事を書き

宇部市 津 秋 六花

出世すりゃ兄が下座で酌をする

拍手程になかった社長の隠し芸

自首する気もう足音に驚かず

神戸市 野村 初甫

六段をゆっくりきくもお元日

共稼ぎうちだけ窓が締つて

岡山県 池田 古心

エチケットと思うた卑下が度を越して

二十四時寝てよし売って居らぬ身は

東京都 石居 高志

焦燥も不安も君と居て忘れ

夜と云う幕に恋をば包まんか

松江市 勝谷 山川 児

団体を迎える出雲雪となり

送別会のふん団風に酌婦がしてくれる

大阪府 早川 清生

譲歩した外相ほめて使節去る

共稼ぎ鍵とお布施を頼んで出

秘書の休めたは社長の風邪のとき

麒麟児と言われき同窓会へ来ず

大阪市 西田 柳宏子

正月から止めるパチンコまだ続き

気に食わぬ奴じゃと見れば向うも見

堺市 辻 圭水

箸一つ洗わぬ男よく動き

元旦高野山に南海バス転落

遺族には雪も悲しく目に残り

加賀市 中松 恒雄

失恋の痛手遠くへ嫁して行き

まず一人墮してやっとな式を挙げ

根負けて受けた賄賂が罪になり

集金を押売並に断られ

ミッチーに身の程知らぬ嫉妬をし

寒空に十字架下げて春を売り

岡山県 野々口 美舟

又先手打たれて姑の肩をもみ

西宮市 小浜 牧人

文なしでめでたく暮れた三カ日

せつかちなたよりを呉れて老い給い

商売の可愛さスリッパもそろえ

約束を後悔してる寒さかな

西宮市 菱田 満秋

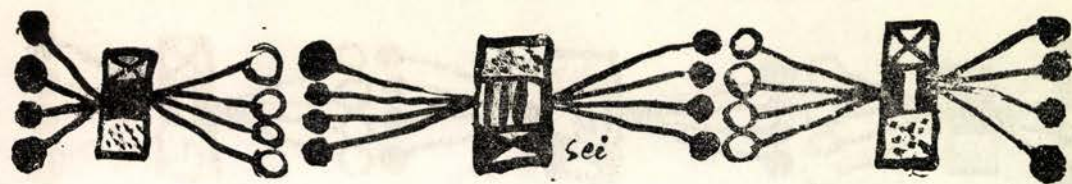
よい歳をとれと女に云つてのけ

元旦をまたスタートにつくつもり

年賀状もろて旧知を更新し

兵庫縣 前川 左文字

友の結婚を祝して



ふれるもの見るもの僕と君のもの

岡山県 池上知恵美

春の泥春の匂いのハイヒール

あくびして涙見せとうない別れ

大阪市 橘高薫風子

日当りの悪い窓なり株式課

仁丹の匂いをさせて不惑なり

下関市 中村九呂平

年賀状嘘字を書いて気にもせず

サックドレス生きるがための擬装する

奈良市 宮口笛生

乗客の眼に機関士の無表情

大阪市 西川 晃

反俗の気骨もあって古本屋

股火鉢して賢妻へくだを巻く

釜ヶ崎風景

おかまに殴られましたとも言えず

名古屋市 野田 一念

カタログの鼻と違うと泣き崩れ

何をする女ぞ寝巻ばかり干し

岡山市 林 葵丘

金婚の温泉孫が旅費を呉れ

神戸市 仲 どんたく

あぐら組む娘へも来た聞き合わせ

よう遊ぶ子やへあなたに似ています

平田市 久家代仕 男

改選に備え墓参の多いこと

全快を信ずる父に癌を伏せ

衰えた父へ奇蹟を信じたし

大阪市 本多 柳志 (三改め)

バスからは見えぬ足跡も触れて呉れ

宴会の恋は廊下で手を握り

年賀状写真何やら言いたそう

死亡通知になって戻った年賀状

出雲市 原 独仙

院長のマスク外した怒鳴りよう

赤線に居たと思えぬ貞女振り

囲われている身へ縁談如何せん

大阪市 大谷 月都

埋め立てをして値上りを待つばかり

もの考える時ではないぞ集金日

都会人鰻焼く間が待ち切れず

岡山市 江 国 幽谷

塵箱も探して見たい十二月

大学へ進む灯が一つ点き

岡山市 光 好陽子

三カ日もう葬式へ二つ行き

計画をたてない中にもう生まれ

日本髪縁談が決ったかと聞かれ

西宮市 河相すゝむ

着ぶくれて短軀愈々持て余し

つれづれにひらく炬燵の易ごみ

西宮市 野呂鶴江

中年の押しに素面で口説かれる

混雑へ先銭取った如才なさ

西宮市 樋口 舟遊

母親の視線のなかで読みちがえ

買物は値切らんパパとゆきたがり

新潟県 高野むじな

順序不同とどん尻を慰める

換算表半ばな客をうるさがり

貰った手袋と母に見抜かれる

住人そっこのけに皇居移転論

あいづらしいと云われる名前のない賀状

高槻市 辻 白溪子

新聞を独身車内へ置いて降り

飲め飲めと招待された方が酌ぎ

高砂市 吉原 紅月

メートル法一升マスをまだ使い

札束で叩かれたらしボス婦り

大阪市 岸 川 漣

割勘やのに先輩の顔で飲み

アイデアを生かすにしてもいる資金

多数決粗末な顔も加えられ

大阪市 欄 蘭

女ならではの出来ない仕事見付け出し

大阪市 石倉 旅風

戎さんまいりで手袋落して来



酒たばこのまず言葉に綾もなく

二見浦日本画風の陽がのほり

大阪市 魚住満潮

もう何も云わずに働くばかりなり

一万円人を小馬鹿にした榮

堺市 田中狂二

お人好し夫婦で貧乏苦にもせず

花札が一枚足らぬ置炬燵

大阪府 林昌男

来客の手ぶらへ子等も寝てしまい

愛媛県 村上旭童

冬山へ登ってまでも死にたがり

選挙選挙草がめだつて来

倉吉市 大前鳴恍

猛吹雪迷惑そうな顔で酌ぎ

反抗の茶漬はやけな音で喰い

鳥取市 北村三歩

はね返す様に反対すぐに立ち

均合っているのは財産だけのこと

神戸市 傍島静馬

一団について白衣をすり抜ける

勝手からママ指図する大晦日

笠岡市 木山遠二

梅一輪一輪を試歩見て戻り

金も女も一向出来ず愛妻家

どん底のせめて親類こきおろし

べしべからずを省き教育たわいなし

大阪市 中谷ハナ子

残り福間抜けな顔々笹を買ひ

冬山で元旦迎えるもひとり

大阪市 平沢保美

サンタさんの来た朝ババも遅刻をし

子の育ち整理タンスを買ひ足して

お目出度うの次集金はよったかい

人生を各駅停車して不惑

二人口ならと添わせたのに孕み

布施市 森下愛論

飲めもせぬのにノコノコついて来る

旅の宿金策でない湯に浸り

姫路市 植村客遊子

つねられて女の指の強さ知る

まるいのがとりえ養子に来いと云う

岡山市 宗高矢寸志

いやらしい出合い買物籠を提げ

百姓へ嫁かぬというが大きな手

同舟近詠

松山市 前田伍健

あと始末せずに大臣辞表出し

年頭の所感そもそもうそ始め

上下ない恋と割切る雲の下

本場から来るへ日本のまね上手

須坂市 高峰柳児

愛の巢へ折れた産着が届けられ

涙ぐむ話し上手についたられ

猪口すでに事前運動含んで居

酔えばすぐ寝る癖正月淋しませ

和歌山市 秋月宏方

実印は眠り続けていてもよし

日本酒やはり坐つてのむお酒

十二月僕に振り向く人もなく

今治市 長野文庫

片棒をかつがされそう選挙戦

世話をした末の始末に金が要り

商店で信用がある浪費癖

今治市 月原宵明

先客は紅の吸口ある女

アパートへ来れば女は世帯好き

割切つて男の好意全部うけ

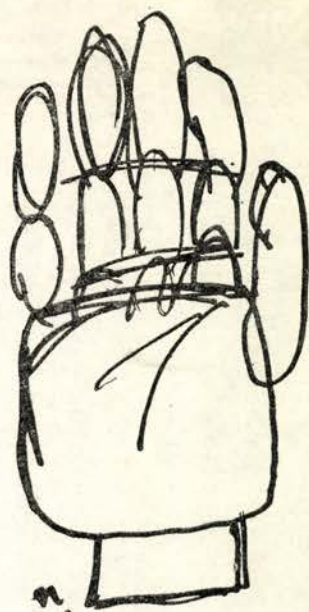
草月流防寒コートにひっかかり

上田市 金子呑風

銀盤を蹴つて山湖に動く点

松活けて初春の床の間寒くなり

家計簿に今更思う大の口



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔六三五〕

お流れを頂戴にてる目己嫌

悪

(多久志)

を心憎いまでに衝いた句である。

〔六三六〕

ヤジ馬は焼け落ちてからコ

ーヒにし

(旋風)

火事場の弥次馬心理というものは非情なもので、次の種

へドット火の手があがると心の底で快哉を叫び、消防の努

力で瞬く間に白い煙があがるとガツカリするものである。

火事そのものと、焼け出された人達への同情とは全く別個

の心理が働らくのである。この句は焼け落ちたので、ああ

これでしまいかというガツカ

リ組が、コーヒーでも飲もうかと喫茶店の椅子に腰をおろし

たというのである。ヤジ馬心理を巧くつかんでいる。作者

はホノルル市に住んでいるが、ハワイも日本も火事場の

ヤジ馬心理は同じらしい。

〔六三七〕

デシヤ焼きの女房隣りのす

しを巻き

(蘭)

この句に詠まれたような女房が、どこにもあるものだ。

「奥さん、すしいうものは斯うして巻くものですよ。奥さ

んのような巻き方をしては、箸でつまんだら、スグ形ちが

こわれてしまいます。」

と頼まれもせぬのに、隣りから、わざわざすしを巻きに来

るのである。「いらぬおせわですわ」と云いたいところだ

が、新世帯にとってはなかなか便利重宝な隣りの細君でもある。

〔六三八〕

出来すぎる息子へ母は低う

いる

(阿茶)

母にとっては血を分けた息子には遠くないが、その息子が社会へ出るとなると、何々

博士であり、幾つかの肩書きえ持つと云うのでは、何々

ちゃんとか、何ボンだのという愛称で呼ぶわけにもいかず、

自然他人行儀に近い隔たりが出来て、すべてに遠慮勝ちになるものだという、出来すぎ

た息子と母親との心理へメスをあてたものである。これは息子ではないが歌手の「ひばり」へその母親が、「先生、先生」と呼んでいるそうであるが、これも、「母が低うい

る」の例にはなろう。

〔六三九〕

姓名学正田美智子の名も並

び

(文秋)

市場附近などでよく姓名学を説いている男にぶつかる

が、それには天下に名をなした人たちが、その附近で新聞

種になった人たちの名を並べ

姓名によって、その人の運勢

が左右されるものであるから、悪い姓名を持っている人

たちには名を変えてあげよう、これから生れる赤ちゃん

には名をつけてあげようと、

宴会の席と見ていいだろう。宴会がはじまると上席の偉いさんに、われもわれもとお流れを頂戴に出るので、自分もその一人となったが、そのときの自分の心理を解剖して見ると、とにかく見知っておいて貰えば何かとの時にムリな願いも聞きとどけてもら

えるだろうという浅ましい心にフット突き当たったので、自己嫌悪を感じたというのである。作者の実感であろうが、

そうしたお流れ頂戴派の心境

人の弱みにつけこんだ商売をやっている。

その姓名学先生が、よい例のところへ早速皇太子妃に選ばれた正田美智子さんの名を並べたのである。穿ち句として面白いと思う。

〔六四〇〕

整然と足袋をたたむも又な

（夜潮）

男なら足袋を脱いでも脱ぎ放なしで捨てとくが、女は

つつましくそれをたたむので、この句はそうした女性の

習性を巧みにとらえている。

どっから帰って来たのである。羽織を脱ぎ、着物を脱ぎ、帯を解き、そして足袋までもキツチリとたたんで積み重ねているさまが眼に見えるようである。

〔六四一〕

出戻りのいつちかわいい娘

（湖山）

「いつちかわいい娘（こ）なりしに」という父親の心情

が、この中六、下五の十一音字の中に汲めども尽きぬ情味となつてほとばしっているし、あまりにかわいがりすぎたのでそれが出戻りの原因をつくつたのではないだろうか、たしかにそれが全部でなくとも、大きく原因しているような気がしてならないという悔も、この十一音字の言葉の中にひそんでいるように思える。

〔六四二〕

フラフラの周りを雪も付いて舞い

（暉光）

最近に流行したことも大人も楽しんだおもちゃのフラフラを詠んだ句はかなりあるが、斯の句のように感じを巧く出したのは少いと思う。

〔六四三〕

御無沙汰の間に石碑宿替し

（蟬子）

生活に忙しいので先祖のお

墓詣りもせず、お寺へもスツカリ無沙汰をしているうちに、お寺が戦禍で焼けたり、都市計画で墓地の移転があったりしたので、いつの間にか石碑が宿替していたというのである。実に長い時間的な句である。

〔六四四〕

書道展覧かみずかはたシ

（花村）

この句は近頃の書道展を観ての感想であるが、従来の書道の概念からは斯うした皮肉が生れないわけにはいかぬのである。

お尻へ墨を塗って、床や紙の上へ、尻もちをつくような肉体派の書もあると聞くから、竜かみみずかシミが判らぬようなのは、まだまだいい方なのであろう。芸術の奥な

んていうものは、はかり知れぬものだ云つておこらう。

〔六四五〕

お泣きなさいとまつてくれ

（古方）

まだ棺側に泣きぐずれているのに、いかに職業だとは云え、そうもぎどうに、もうそれ

ぐらいお泣きになったらいいでしよう云うわけにもいかないので、しばらく待っているのを、第三者がこの句のように詠んだのである。

第三者の眼は斯うした悲劇に対しても常に冷静である。それは川柳が常に真を求めてやまぬからである。

「足だけ写しなや」に自然にユーモア味がにじみ出ている。

結婚式場
長生殿

神殿(2)控室(16)宴会場
(和洋9)御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか、貸衣装一切を完備しております ●6階

金曜
定休



松坂屋
大阪日本橋三



(宝塚映画製作所で梅先生を囲んで記念撮影)



川柳ルネ

宝塚映画製作所訪問

——川柳人の句箋は

何をとりえたか——

ンよろしく、
一行十五名は
宝塚行きに乗
車する。

二月とはい
え暖冬の窓外
はすっかり春
の陽ざしであ
る。終着駅近
くでは、もう
梅がほころび
ていた。宝塚

駅で待つ西宮組の多久志、史葉、
紀美子の三氏がわれわれを出迎え
てくれる。ここで各自に句箋を渡
して、いよいよ宝塚映画製作所へ
乗り込むことになった。

宝塚少女歌劇で有名な大劇場を
右に見て、ふと、「モン・パリー」
を口ずさむのも快晴に恵まれた
暖かさに心ウキウキしたのであら
う。

宣伝課の安達善行氏の案内で、
まずスタジオ内の法善寺を見る。
「花のれん」のセットをもう一
度、いまクラシックしている「愛情
不動(仮題)」に使うのだそうで
ある。
撮影がはじまる間を、作句の時
間としたので、諸氏はこれをどう
いう川柳の眼でとらえんかなと、
張りボテの壁をたたく人、表は家
裏は丸太ン棒で突っかいをしてあ
るあたり、こまかく観察する人々
が句箋片手にウロウロする風景も
ほほえましいものがある。
「ちょっと腹がへったなア」と、
誰かが言うと、
「その角に関東煮屋があるし、
向うの横丁に夫婦ぜんざい屋があ
ったぜ」とは文蝶氏の声である。
多久志、史葉、すむ、三氏のカ
メラがそれらをキヤッチする。こ
うなるとみんながスター気取りで
ある。
「この写真が川柳雑誌に出たら、
あんだどこへ行きはりましたと
家内にキメつけられるよ」と葉
氏。
賽銭箱を手にして「なんや、底
があれへんワ」とはしゃぐのは奈
良子さんと葉乙女さんだ。

法善寺ボクを明治へ連れ戻
し
セット街中からバアと云わ
れそう
うちよりはましなセットの

同



(法善寺横丁のセット街)

家が建ち

同

オープンセット裏へ廻って
大笑い

葉

青のりで灯籠の苔とは恐れ

入り 多久志

張ボテのセットなんでも叩
いて見 梅志

呑めそうにすだれがゆれて
いるセット 同

腰かけるとここどこにもな
いセット 同

落書もかんじを出している
セット 同

こけまでもそっくりそのま
ま法善寺 史葉

ぜんざいが食べたくなった
セット街 柳志

錯覚の頭振り振り見るセッ
ト 旗風

法善寺のセットではしゃぐ
おれきれき すむ

セット裏柱の列が林立し 葉乙女

からからと音がしそうな車
井戸 奈良子

もたれたら家がこけると注
意され 一三夫

本モノの石とは知らず叩い
て見 同

撮影がはじまったという知ら
せに、一行はアチャコ氏の演技を句
箋へ乗せるため本格的の見学に入
る。

ステージ一っぱいに、寄席香月
亭が出来ている。戦災に遇わぬ以
前の花月そのままの再現だ。路郎
先生はと見ると、棧敷にどっかと
腰をおろしてスタジオ風景をこ
ろろと見ている。小道具の座布団
も、かつての吉本興行の紋が、ね

(ツェイド・イン)

大阪急梅田駅的全景、(2月22日
の正午) 11

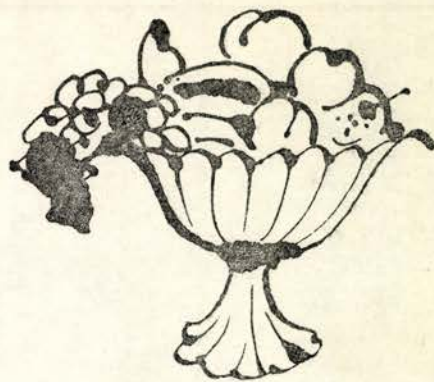
正面改札口付近で、群衆からは
なれた人待ち顔の人々。文蝶、葉
梅志、柳志、すむ、蕨風子、旗
風、勝彦、吉雄、奈良子、葉乙女
一三夫という川柳人が、路郎先生
の来られるのを待っている。

構内の時計はあと二分で十二時
である。時間に正確な路郎先生が

林さんを連れて見え、

「やあ、ご苦労」

と、いうようなフアースト・シー



いのちある句への近道

入選の條件

句会でなぜ没になったか

初会でもよく聞かされた「なぜ没になったか」と、ききたいということ。
しかし、句会では時間的にそれはふりな注文である。そこで初会者のために、特に四会者をお願いして、本社句会の要綱から、没句を案上にあけて、いろいろの角度からそれを検討していただいた。『福寿草』

「賀状」から

麻生 茂 乃

私は本年で六十七回目の春を迎えた。

その新春句会で「賀状」の選をした。私が呶々の声をあげてから

でも、六十七回新年の挨拶が、人たちの間に取り交わされているわけである。

父の時代から、祖父父の時代から、連綿として続いているこの「しきたり」は、決して目新しいものではない。

柳屋の古い人達は、幾度となく

いようである。

クリスマスカードに、メリークリスマスの字が忘れられていないように、賀状には固守された一つの型があり、それに纏る連想もあり逸脱したものになかった。プラス情緒というような句にも出合わなかった。

没の中には入選句の中へ入れてもよい句もあったが、ある一線を区切って、それから下は潔く没にした。

同想の句は表現のうまいのをとった。着想が変わっていても、調子がわるかったり、表現技巧の稚拙なのは捨ててしまった。

入選句に比べて、没句の句箋が片手に握って、ほうばる程あったのは、ちょっと気の毒な気もした

が、自分の好き嫌らいの選はやりたくないのと、スペースの関係上、誌上へ発表する時に再選をせねばならぬからである。その時に掲載もれになれば、なお気の毒な思いをするからである。

「賀状」の句の着想を種別分けにすると、大体次の通りである。

- ① 賀状と選挙
- ② 賀状と猪
- ③ 新婚者と賀状
- ④ 賀状と悲筆、又は筆不精
- ⑤ 賀状と無沙汰

編集局から、没句について逐一批評をとの希望であったが、数ある句をならべての批評はスペースがゆるさないから、ちょっと気づいたものだけを拾いあげることにした。

当選へ純な賀状が利用され右の句の「純な」は句主の考えであって説明におちている。

箸紙を賀状の筆に頼まれるこれは戴いてもよい句であるが、願詠の場合、この句は箸紙に重点が置かれている。

次の句は調子に難がある。

去年来たところだけ出しとく
年賀状

去年きたところへ出しとく年賀状
でよいわけで、一字多いだけで調子がスムーズでない。

年賀状にあだなをかかれて暖たかし

年賀状にあだながかれて暖たかし
か、或いは

年賀状にあだなをかかれ暖たかし
と、すればなだらかである。

一字のことで調子が左右されるのだから、文字の区切りや、言葉の配列のぐあいでは調子の峻厳、軟硬は自由自在である。（暖は気候の暖かさで、この場合のあたたかさは温情からくるので温の字を使ううべきであろう。）

① 返送の賀状淋しさ限りなく

② 年賀状よこさぬ友の身を案じ

右の二句は、どちらも支橋の現われであるが②の句は事柄として、あつかわれ①の句は返送の理由は死亡か、転出か、いずれにしても句主の友情が言外に感じられる句である。こういう句は雑吟に多く見られる句で、句集に編むにはよいであろうが、普遍性の中から特異性を探がし求めようとする願詠吟には相な句である。

世話かけたことを覚えてい
る賀状
などは前記の句より、いわゆる川

柳らしい川柳と言えよう。

次に描写に何の味もなく、着想に批判がなく、ただ句主の日常茶飯事とも見られる句を二、三あげて再考を願うこととした。

一枚一枚炬燵で賀状読みながら

賀状よむ炬燵の横で餅が焼

け
お雑煮へ賀状の束の着いた

「盛装」から

中島生々庵

音

★優秀句

年賀状戻ったまんま縁が切れ

保美

あまったら母も出すところある賀

一瓢

年賀状今年も無沙汰予約する

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

生々庵

箋の中に溶け込む気持、句の中の

「いのち」の「いぶき」を汲みとる真剣な心構え、こうしたことは

当然すぎる当然な事であり、

ところで選者にもいろいろと段階

があつて、路郎先生のような天下

の名選者はそうざらにあるものでは

ありません。ましてやその時の

句会場の雰囲気とか、精神的或は

肉体的健康の工合とかに大変左右

される事も否めない事なのです。

私は選者を仰せつかる度に、この

大きな苦悩に先ず襲われるので

す。この悩みは一面選者が徹底し

た謙虚であると同時に、自らが真

剣な投句者であるとするれば、又そ

れだけ、必然的に味わされる点で

もあるのです。襟を正して没句に

合掌したくもなると云うもので

百句の中から、そこはかとなく抜

き出して紙面の許される限りの句

数を皆様と共に供養して上げ度

いと思ひます。

私の選した課題は「盛装」と云

うのですが、とりつき易い題だ

と思つて飛び付くと意外に難題で

あつたの感じが全体から受けた選

後感でした。

盛装をしてもなまりが出て

しまい

着想は新しいと云うわけにはいか

ぬが、もうちょっと何とかなした

ら抜けたらうのに感が深い。

盛装をしてボチ袋たと蓄

め

ボチ袋をたんとでなく、たとえ一

つでも日常の生活と違つた今日の

るのであつて、たんと蓄めと云う

表現が如何にもぶちこわしである

我が盛装服一着で事が足り

下五のやりっぱなしは悪心出来な

い。一段の努力が欲しい。

盛装で来たこの気持も知ら

ぬ彼

これも前の句と同じように中七が

少したるんでいる。後に続くにし

ては下五が如何にも投げやりであ

る。

盛装で写した写真眼をつむ

り

中七は貴重な字数の乱費である

し、この中七で句が死んでいる。

盛装へ見ぬ振りをして靴磨

き

句意はよく判るが所謂舌たらず。

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

音

新児童音楽サークル

募集

バイオリン科・アコーディオン科・チエロ科・ギター科・ピアノ科・楽典科・声楽科・音感教育科

講師

ト徳子行弘
ア永田真
生永田真
麻徳渡坂市
大阪放送音楽団専属
大阪放送音楽団専属
大阪音楽大学出身
大阪放送音楽団専属
毎日放送専属

成人科（夜間）も設けています。詳細は当会館で説明書をお求め下さい。

奈良県生駒市本町2丁目103番地（若月）

申込所 新児童音楽サークル

電話 生駒 27番

盛装で婦人科へ来て悪びれず

中の字余りが少々重苦しいのに、続く下五から更に悪い感じを受ける。

一寸そこまでと盛装嬉しそ

う
着想の凡でない事は相当の作者だろう。然しおいしくてたまらぬ程には頂き兼ねる。惜しい。

去年のと違う一装用でくるも少し勉強してほしい句。
七五三月光仮面が手をひか

「銚子」から

西尾 菜

新春句会兼題「銚子」の没句の批評を致します。どうせ空っぽになった銚子の事故、いける口には余り興味のないことですが、何れは又酒のはいる銚子のことですから、下戸も上戸も読んでいただき度い。最初選した句が約五十数句ありましたが、余り多いので、三十余句頂戴致しました。婦りまして没句を整理再読致しました処、可成騒々しいあの会場で、短時間の中に選をした私にとって、大変自信を得たことを先ず嬉しく思

れ

こうした句は一応選者も予期してはいたが、如何にも読みふるされた写生句で、表現も稚拙である。

★優秀句

盛装は借り着と見えて酔い切れず
柳 志

盛装のわりにお金は持って居ず
月 都

盛装で出て押売りをたじろがせ
水 客

本社句会という会場が大きすぎたわけで、支部の小句会なれば、頂戴となったことでしょう。銚子とかくし芸というのが十三句。

銚子手に十八番を踊り出し

隠し芸銚子を杖にして踊り一読してわかるとおり苦勞せず

作っておられます。ここまでは誰でも作られるのではないでしょう。一本の銚子という句が十二句。

一本の銚子で旧交あたためる

一本の銚子親子でくみかわ

し
もう一つ、つつこみがないので、そうで川柳、又は報告川柳という事になっていいます。幹事と銚子という句が十五句。

お銚子の運びへ酔えぬ幹事

の目
幹事もう銚子の数を気にしなく

相撲で言えば十両筆頭で、惜しいところで幕内をのがしました。銚子に目印をした句が十三句。

付き合いに座る銚子へ巻く

紙撚
お茶入れた銚子にこより巻いておき

もし相撲吟なら、前者を戴くのですが、全体から言えば、惜しい哉となったわけです。二級酒と銚子

が十一句。
結構なお銚子二級酒とは知らず
二級では銚子が泣くと皮肉られ
やや陳腐の評はまぬがれないでしょう。その他十句以下の類想句では、仲居と銚子、熱燗と銚子、名所と銚子等々ありましたが、又

安産のために

フタカルニウム



姉妹品 ワタカル・ビタAM 二〇〇錠 三〇〇円
ビタミンB1・B2・AM・D・鉄・配合

句の中三十数句に減りました。約二十句の中から批評致しますと、朦朧の視野に林立した銚子両の掌に銚子温めて妓の技巧

この句は朦朧、視野、林立、技巧という漢語が駆使されているわけですが、川柳は申すまでもなく、庶民文学として発達した文学です。出来るだけ平易な言葉をもって、うたい上げたいと思うのであります。論ずれば長くなりますが、現今の俳句が、ゆきつまったわけが、新しさを衒う為か、字引なしでは読み得ない文字を使っている点などからして、川柳の強味はあくまで、わかり易い日常語で吟ずることにあると思います。と申しまして、決して漢語不可論をするものではないことを、御承知おき下さい。朦朧という言葉は、短

句会で選をする場合、あの僅か

の限られた時間内に選句をして披

「車窓」から

北川 春 巢

的でよくその雰囲気を見わしたとした場合、次に視野、林立といふかたい言葉を、最も平易な言葉で、やわらげてこそ川柳味の川柳ではないかと思うのであります。又銚子温めて妓の技巧も、この場合妓と読まず、妓と読まずれば技巧を、しぐさ、とか何とかバツリとはぐすことが川柳の必要かと思うのであります。この二句は同じ句箋に同じ筆跡で一字一字至って真面目な楷書で書いておられますので、この句に対する御意見もおありのことと存じます。出来ればゆっくりと、お話し度いと存じます。又中七の温めてのてをたとした場合は、上の句の説明になり、てにした場合は下五の今の妓の動きが想像されるので、温めては動かないところでしょう。

擬人法で、大変面白く一度は戴いたのであります。何回も口ずさむ中、他の句と比べて段々と弱くなっているのが第二回目に見えなくなったわけでありませう。その他お銚子の数をとがめぬ三カ日これは過去に類句があるのを憶えていた事。しんしんと更けて銚子の数もふえこれは調子が余りよかったのでつい戴いたのですが、何回も読みかえず中内容の乏しさが遂に没の部分に入ってしまったわけですね。句主のわからぬをいいことに妄言お詫び致します。

★優秀句

見おぼえの銚子本家でよはれて来
お銚子を持つ仕事とは子に言わず
奥さんが最後の銚子勧めに来
春 巢
阿 茶
幽 谷

講しなければならぬのであるから、選者も人間である以上或は誤選もないとは云えまい。私はいつもそれをおそれている。没になるべき句を入選させた場合には、雑誌に発表せられたのを識者に見られて選者が物笑いの種になるまでであるが、入選させられるべき句を誤って没にしたような場合には、その句主に対しても、一般の作家や読者に対しても無礼極まりないことになる。以前本社において没句供養というところを行つたがいくら供養されたとして、そのような句は成仏出来まい。

この度び、その没句について、「何故没になったか」を発表したら、という企画がなされ、没句を持ち帰ってゆっくりと再吟味する機会を得た。これは没句の作者にとつても、はたまた選者自身にとつても大いに勉強になることと思われ、この機会を与えられたことに對して感謝する次第である。

さて、私に与えられたのは兼題「車窓」であった。没になった句を計算して見ると二百五十一句あった。入選句が三十六句であったから、入選率は約十二分である。そして没句を念入りに読み直して見たが、その中には残念ながら（？）入選すべき程の句は見当らなかつたこれに私の心配は一つ減

ったわけだが、もう一つの心配は入選させた句の中に没になるような句が果して入っていないかただらうか、ということである。これは入選句誌上発表後再検討して見たい。句会慣れた人は、えてして選者当てこみの句を作り、選者がまたよくこれに引っかかるものであるからである。果して私もこれに引っかかってはいわないだろうか。

それはそれとして、次に没になった句を見て、何故没になったかを考えて見たい。しかしこのことは、抽象的にはどの選者でもが今迄に何度も云つたことに尽きそうである。聞いてみれば、そんな簡単なことか、と誰でも云いそう

ことである。従つて以下に説く所のことは、ごくごくの初心者だけに申し上げたいと思うのである。

一、類句

没になった原因に類想、類句がある。類句についてはどの題についてでも云えるが「車窓」という題は殊に句想が狭いので類句が非常に多かった。これを大分けて見ると

- ① 車窓と富士山を組み合せたもの
- ② 車窓と見送り、殊にまた新婚の見送り
- ③ 車窓と弁当その他の販売り
- ④ ビジネス特急こだま号の窓が開かないこと
- ⑤ 車窓とトンネルとの組合せ

麻生路郎先生著

川柳とは何か

一 川柳の作り方と味方

送 価 二五〇円
三二〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・鳴咽——そうしたものが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかんして發生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

というふうになっていた。

⑤ 富士山の句が全部類句だといつて没になったのではないが、富士山は誰でも考えつく想句であることには間違いない。誰でも考えるようなことは、余程うまい所をつかむか表現法を考えないと選には入り難い。入選句の中にも富士山の句は三句あったが、没句の中にはこれが三十一句の多きに上った。少し没の例を上げて見ると落書きを消して車窓の富士が暗れ

次々と変った富士を見る車窓
車窓から見れば富士は霞んでい
車窓から富士が見えたと起こされる
窓越しにフオーク休めて観る富嶽

「富嶽」など変った表現を用いているがいずれも大同小異「富士山と車窓」という概念の中へ入れられる。また車窓から見た富士山の句は以前に作られた句も多い。ということを知らねばならない。そんな意味で三十一句もが没になったのである。

⑥ 「車窓の別れ」をテーマにしたものが没句の中に二十七句（入選句の中には四句あり）また新婚旅行を見送る句が、前記別れ

の句以外に九句（入選句一句）であった。二、三例を挙げて見よう。

発車ベル車窓の顔がはやけ
しばらくは車窓について走る母

お別れをする手車窓でからみ合い

幸福へ車窓の二人少し照れ

送られる方が恥かしい車窓

⑦ 「車窓と物売り」は没句が十四句（入選は二句）で、没句はいずれも入選句に比べ表現その他に難があった。

弁当屋はるかに遠い一輛目
車窓からお茶買う白い腕が出る

⑧ 「こだま号」の車窓は流石に新しい狙いで、古い類句はないが入選二句、没句六句であった。没句を列記して見ると

開かぬ窓乗せて上げたい母の亡き

手マネして「こだま」の車窓の内と外

手と眼とで別れを惜しむこだま号

顔の出ぬ窓を見送るこだま

こだま号車窓あわただしい
変りよう

バントマイムの別れ車窓の
硝子越し

最後の句の「バントマイム」という言葉には一寸心を引かれたが、「こだま号」がはっきりしていないため没にしてしまった。いずれも入選句と比べて頂きたい。

⑨ トンネルと車窓の句が没の中に九句あった。

類句はこまかく分類すればまだまだあるが、これくらいにしておいて、その他没になった句で気付いた点を挙げるならば

二、下品なことや無理に笑わせようとした句は没である。例えば

車窓から荷物投げこみ座席取り

車窓から飛んだ帽子はそれつきり

旅廻り車窓に不入りたたきつけ

満員車酔うた友達窓へ出し

三、特殊な発見をするのが川柳であるが、余り特殊すぎることに、

（あり得ぬことではないが、殆んどあり得ないような）はやはり没である。私自身も路郎先生の選に

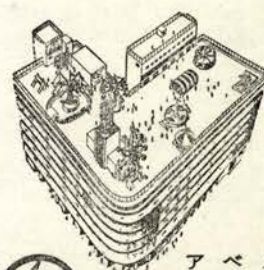
このような句を出して、没になったあと考えて見るとこの条件で没

になった、と思われた句をよく作るの、人さんに余りえらそうにも云えないのであるが。例えば

一瞬間バチンコ屋の数を数えてみ

車窓から大事なカメラ打ち

お買物は近鉄へ



アベノ
近鉄
電話 8331

落し

車窓から手を握る写真が遺品なり

四、なお次の句は類句とは云えないかも知れぬが、表現上似た句があるため没にした。

恩師発つ車窓孫弟子曾孫弟子

見送りの句であると同時に、路郎先生の「古稀はよし弟子に孫弟子曾孫弟子」がある。

父の計へ須磨も舞子も見ず走り

私の句に「通勤は須磨も明石も読みふけり」がある。

裕福な村が車窓へ屋根瓦同じく私の句に「この島の景気を瓦屋根に見る」というのがある。

五、その他表現のまずいために没になった句もある。一々例は挙

げないが、表現殊にデニヲハは一字のことで意味が強まったり弱まったり、変ったりするものである。句を何度も何度も読んで見て（路郎先生は特に「声を出して読め」と云っておられる）推敲する必要はある。小句会であれば選者がそれを訂正して入選にすることもあがるが、今度のような大きな句会では没の句はほとんど捨てて行ってしまおうから、作者自身が出前に充分考えて頂きたい。

予定の紙数も大分超過したのでこのへんでペンを置くことにする

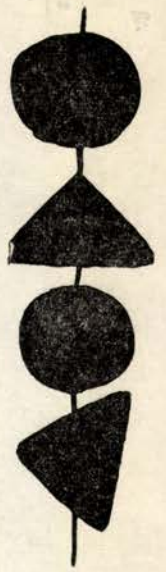
★優秀句

故郷が近く車窓をふき直し

途中下車せよと窓辺に友が寄り

車窓から見る日本は飯が食え

義弘
香林
永新



養子開門

東野 大八

私こと、この一月二日からさるやんごとなき事情あって養子の身分になってしまった。先年死んだ親父が、よく口癖に、男一匹どんなことがあっても養子にだけはくなよ、とよく言ってくれたものである。おふくろだって同様で、コスカ三合あつたらヨシにだけはなるなよ、と鼻たれ小僧の昔からよくいきかされたものである。それがついよんどころなき事情で、いともあつてなく問題の養子という身分に相成ってしまった。おやじもおふくろもトラ歳でそのできた子がまたトラ歳の私というから完全なトラの子、トラッ子である。三毛猫ならさしずめ生れながらに二十万はする口だろ

う。世つぎの娘が他家へ嫁いで、ガラン洞の古屋敷は女房と私（これからこの様に私は下へつけねばな

らぬ）に子供三人となった。水入らずは悪くないが、きて手前どもだけだと相成ると、こうるさいのは親せき共、ここは本家、どうしてもこの家だけは……といいい出した。どんな立派な家柄だか知らないが、ピツタリ戸、障子をたてきつても炭火がすぐになつてしまうような寒冷地帯である。土蔵はあるが壁はおち腰板ははずれて、その二階へは傘をさして上らねばならない程の雨風オンボロ。田も畑も山も今は人手に渡つて小便する土のすき間もない。そんな家の跡取りに人間格下げて収まるなんて、心ある人がみたら鼻に小じわをよせてわらうだろう。しかし、人の世はまなならぬ、江戸時代には掛軸一本がはしくて養子になつた旗本もいるのである。

ところで、その養子縁組だが、養子になるのは戸籍へいって紙一

枚の手間ですむのかと思つたら大まちがひ。まず双方離婚手続きをとつて一旦アカの他人になり、改めて結婚の仕直しという形になる。そのみではない。子供三人がハミ出した。この認知には、民事にかけて承認を得てからでないといふ自分の子にならない。バスと電車に一時間はど乗つて、簡裁の冷たい控室にと出かけた。法とはなるといふ冷たい、とはなみずをすすりながら、女房と二人で長いこと底冷えのするコンクリートの一室で待った。女房は、自分がエラクな亭主が格下げになるのを大層気にやんで、いつながめても相すまない、という顔を向ける。どうやら順番がきて、一室に入つたが、男二人は女房にばかり話をする。何気なく相続権のことに口を出したら

「貴方にはその様な発言権は全くありません」と足の裏の様な顔をした司法事務官がびしゃりとそういった。話は十五分ぐらひで終つたが、廊下へ出て気がついたら、私は自分の坐つたところへ上履き一そろいをそつくり忘れてきたことに気がついた。過日、一人の男と会つた。話たまたま養子の件になるとこの男、がぜん親身になつてこういった。「私もトラ歳で養子です。市会議員にもなり、ここの市長をコテンコテンにへこました私ですがね、さてその身分の点になるとですな——」

と、急に角のとれたいい方になり、養子生活二十六年の大先輩の懐旧談におよんだ。そして、その結論としてつぎの様に語つたのである。「おれは養子だ、ということをやセツタイ女房に言わぬこと。それから、他人の前でとことんまでおれをイバラセロ。それでお前がハラをたてたら決してその場で怒るな、二人きりのときにその小言をいえ、とこ女房に言つたんですな、一種の主権協定みたいなもんですな。それから、養子で一番大事なことは、女房以外に女を作らんことです。よろめいたら最後一巻の終りです。女房へのサービス、これがですな、このわずかな時間こそがですな、男とし

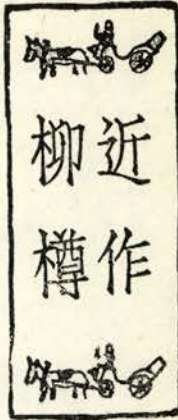
大阪・名古屋・伊勢を結ぶ大動脈 近鉄特急ダイヤ

大阪上本町発	近鉄名古屋発	宇治山田発
7.40	8.00	8.40
8.40	9.00	9.40
9.40	10.00	
11.40	12.00	12.40
13.40	14.00	14.40
15.40	16.00	16.40
17.40	18.00	18.40
18.40	19.00	
19.40	20.00	20.40

上本町 9.40 18.40 名古屋 10.00 19.00 宇治山田 12.40 20.40
は お乗で 便 利 な 新 設 特 急 ぞ 愛 乗 下 さい
・ 印 は 二 階 展 望 室 つ き ビ ス タ ・ カ ー

座席指定特急券 5日前から発売
近畿日本ツーリスト 交通公社 特急始発駅

近畿日本鉄道



麻生路郎選
北川春巢選

十代の自殺我が子の顔を読み 兵庫縣 永尾 永断
正月の雑誌附録で妻は選り
青春の夢を私立にした二月
盃洗に移すお酒を注ぎたがり
質問に詰った父が眠たがり
頼りない夫子守りとして頼り
黒髪を脱いで楽屋の水を飲み 出雲市 山本 朱紅
おしるこで酔えますかいな慰労会
今年こそ頑張りますと寝正月

S子嬢転動
菜の花に期待大きく移植され
オモチャ屋へ小さな意地が座り
残業の疲れへ税が無情なり
子の顔と並べ自慢の菊を撮り 枚方市 草深 酔舛
正月につぶすおんどり撫でて見る
ニコヨンはママゴトほどの土運び
お茶こぼし笑い合うのも汽車の旅

下向道の白衣横目で見て通り
胃袋に酒を充たしただけの春 熊本市 田口 麦彦
月ロケットの記事に なんだ汚職記事
蝶タイをしめてうつろな酒をのむ
天気予報当らずとてもよい平和
貸借対照表広告をして落目
良縁のための入学願書なる 鳥取県 鈴木村 諷子
この裏に後家住むことも郵便夫
世間から娘の婚期きかされる
中学の子は再婚を喜ばず
感情を火箸のふるう圧えよう
秀才の長男があり貧しくも 岸和田市 内藤 ささ子
底をたたいて手品師はまだ騙し
パイプまで火がつきそ 王手飛車
こえ車初荷の列へまぎれ込み
重箱は今年も同じ目出たさよ
青春をすり減して神の愛を説き 堺市 沢田 美喜
窓口に造花を活けて応対し
ニギビミたいに街のボスが増え
頼母子を落してスキー愉しまん
恋忘れよ恋忘れよと木枯しが吹く
米売って一万円札の軽いこと 兵庫県 遠山 一雨
山の中に建てても庭を造りたく
初詣あゝ人間に善が在り

雑筆
春秋
痴人の柳信(二)

木山 遠二

雅兄よ、其後お変わりありません
か、小生方はチョツとばかり変つ
た事がありました。長男の笙二が
嫁もらつたです。仲人は麦野君で
す。
仲人が新米なので信用し
三三九度と親類益が無事に済
み、次が花嫁の宮まいりです。随
行は、今日から姑と云うものにな
る家内
姑もしずしず運ぶ宮まい
り
と云う訳です。ところが
「妾、着かえして詣りますわ、こ
の儘だと歩き難くてほんと駄目な
んです、かずらもとるわ」
花嫁が云つたのです。
「いや其儘其儘」
麦野君がうろたえたと
「だったらあのハイヤーお願いし
ます」
時間の都合もあつてつまり宮ま
いりは後でと云うことにしました
が、花嫁のこの申出には皆の者顔



文化住宅日曜の朝明るすぎ 岡山県 横山 一声
満員車曲った腰が少し伸び 同
内職へ妻は小さい夢を持ち 同
福の神入れる窓から風邪を引き 同
麻雀の負けは月謝と書いておき 美称市 安平次弘道
工事場の焚火をもったいなく眺め 同
株屋から妻のへそくりへ賀状が来 同
安く買い高く売れとの投資欄 同
不景気へ正月休み長うなり 見島市 伊丹柳瓢子
上役にすまないように男産み 同
父ちゃんなら来ないでほい参観日 同
クリスマス一日信者の千鳥足 西宮市 藤田一本歯
失恋をしたネクタイを払い下げ 同
飲む時の元気がほしい仕事振り 同
大吉へキス勇しいイヤリング 田辺市 室井八九寸
誘惑に勝った母の子右代表 同
女なら美智子ときめているお腹 同
ちよっぴりの火種炬燵の恋ぬくし 高知市 須藤 俊江
霜踏んで恋は鳥射つ人になり 同
血圧の旦那へコブ茶すすめとき 同
恋抱いた儘で不幸な角隠くし 大阪市 板東千代美
捨てられてから結婚を思った 同
高島田舞台と別な化粧して 同
花活けて見ても伴物足らず 西宮市 末沢 友子
冗談が云えなくなつてからやつれ 同

地味に着ていても晶子の血がさ 同
お元日女世帯へ飲みに来る 豊中市 石川ひさみ
やけくそで嫁く娘と知って引 同
板東千代美様の婚礼を思う
舞扇これが形見となる品か 同
来なければ来ないで淋しお正月 大阪府 谷沢 好祐
内職の疲れが寝込む松の内 同
プリンスの恋愛才になる時世 同
年の瀬が越せない筈の除夜の鐘 貝塚市 杉本 一鶴
ぶっつけ本番みたいに殺しする 同
サンタクロースへ母もねだつて居 同
どしや降りの日の大安を選 和歌山県 木下 一休
ベダル踏むことさえない世と変り 同
借金の上塗りをする子に病まれ 同
こうしてはおられないと火にあり 大阪市 河井 庸佑
強力二本立看板程も入ってず 同
なくてはならぬ人といふ左遷され 同
御機嫌の顔へちらつく雪でよし 兵庫県 藤本ゆたか
子の晴着つくつて親は寝正月 同
熱燗を注文してから雪はらい 同
ビエロたる為に身心すりへらし 松阪市 万濃 修
東京で聞ける話を車中談 同
理論よりやつぱり金が欲しいです 同
パドミントン春の帽子に来てと 大阪市 小畑 東二
ベストセラーだつせと祖母に読み聞かせ 同

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴) 三〇円
送料(二冊分) 八 円

「それっ花嫁だつ」と逸早く飛んで出るべく沿道の女子ども連がチャンと待機しているのですから、それらの前を出来るだけしずしず、と云うのが今までのしきたりなんですからね。「美しき重労働だわ」と花嫁あがりの誰もが揃ってこぼすに無理がないのです。

結婚の簡素化運動には懐を通じて頗る共鳴の私ですが、新婚旅行の方は仲が別と考へまして、この際懐へは目をつむつて別府へ行かせました。

新婚旅行親を置き去るよう
に立ち

式当日は新郎新婦、何やらぎこちなく見えたのが、旅行から帰つて来ると際立って「よく話し、よく笑い」家の内も外も明るくして呉れました。

新夫婦の仲老夫婦ニコニコ

し

遇う人毎から「ほんとにいいお嫁御を買われました」と祝福されると、悪い気もちはしないものです。ね。「おらが家の嫁は世界一さ」とおめでたくもなるのです。身のほどを知り良縁と信ず

松高秀三

家内も、目をほそめてホクホクし

一
〇五二一
〇五五六
錠錠錠錠
ウロコ印

武田薬品

ホホホ

B12

錠

★肝臓を強くする

悪酔
に



- 会長も決らぬままに酒となり
外聞もなく赤電話の高い声 西宮市
松の内すでに今年の風邪を引き
死んだ気でやれと尻見てくれるし 滋賀県
スマートになりに願うフラフープ
雪道を対面笑うて譲り合い 鳥取市
献立の知恵を八百屋で教えられ
二つ折靴公私を使い分け 宇都市
手切金女泣く泣く確かめる
顔洗う猫見習えと子を叱り 笠岡市
勢かりて不平不満を肴にし
売った山伐り出すのを見度く 兵庫県
押売りを断る強気金がなし
口だけは達者ギブスのスキーヤー 大阪市
とんどに背向けて棟梁指図する
羽根をつく妻の若さへ子守りする 西宮市
美しい花を売って夢もたず
満員へ日本髪も負けていず 京都府
日本髪結うたを神様にも見せに 宇都市
フラフープ回した腰ですねている
ソロバンに合ったこたつで温く 同
布子着た子供も混るフラフープ 大阪市
羽根を追うセットの髪が気にか 同
神様も臨時を備う三カ日 玉野市
約束の五時へペダルの息が切れ
- 同 村上 球絵
同 土守 蜻蛉
同 高田穂波子
同 平田 実男
同 佐内 隆文
同 河原みのる
同 藤富 淀月
同 筆坂 町人
同 都倉 求女
同 神田 豊年
同 萩尾千代子
同 小谷 仙山
同
- 三回忌父の短気をなつかしみ 宇都市
卒業はわけなく出来る案内書
遊ぶより縫う気になった針はじめ 岡山県
一万円紙幣暮れの野菜へ借り残し
総裁の妃殿下と撮る平社員 大阪市
一億一心ついていけ 右派と左派
医者を嗣ぐはずの息子がギター 奈良市
スクートリンクにて
転んでは笑いを残し行く若さ
ワイフには済まんが夢で逢い続け 伊丹市
人妻という名に恋しただけの恋
胃潰瘍切って五回もめしを食べ 西宮市
芝居通テレビじや駄目と立見席
進んでる医学へ死んだ子を思い 大阪市
終電で帰るに派手なパフ叩き
お目出度が重なり夫婦で分る 京都府
正月もすんでサラリーだけを待ち
人間の忙しさへ悠々奴唄 倉敷市
足の指電気炬燵を調節し
真物です皇太子さんの初笑い 大阪市
職安窓口
求職者職員よりもパリッとし
新築へ引越しもあり年の暮 笠原市
ひとむかし前の着物が地味な妻
窓越しに豆腐も買える新世帯 西宮市
- 品川 酔歩
同 杉本たつよ
同 丹波 太路
同 内海 敬太
同 小川静観堂
同 中橋川太郎
同 米浪進之助
同 塚脇 笑太
同 小倉美音子
同 本村摂氏梵
同 杉原 愛鳩
同 酒井 丹謡

お知らせ

バックナンバー御入用の方は、
往復ハガキでお問合せ下さい。

川柳雑誌社

当世のしゅうとしゅうとめ
たあいなし

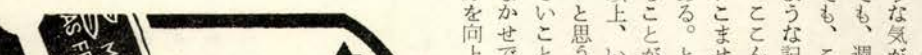
仲人の麦野君は「何しろ学校は
優等ばかり、勤務の成績は頗る優
秀、それに天性明朗で而も大変美
人だよ、凡てにおいて満点だ」と
ひちくどく並べて居ましたし、私
たちもそう信じて居るのですが、
然し一応貰った以上はこちらのも
のだから、少々謙遜した点をつけ
なくてはと思うのですが、さて何
点にしたらよいのでしょうか。そ
れに器量の点数となると昔と今と
では規格が違うから、吾々明治生
れには一寸苦手なんです。

正月には新夫婦、必ず帰って来
る筈です。雅兄も久しぶりに是非
やって来て下さい。新、旧夫婦を
ろってお待ちしています。そして
序でのことに新婦の採点の方も、
依怙ひいきのないところをお願い
したいと思つて居ります。

仲人の嘘笑い合い睦じき
いや、これは麦野君には内緒に
願います。どうも失礼しました。

4Sの世に

國費でクリーニングさる家を持ち	西宮市	三上 英路
ドタン場になつて助太刀用が出来	大阪市	山口 白帆
元日を寝て暮らされるいい生活	金沢市	桐谷 紋六
燈台へ旗立て賀状船が寄り	下関市	宮藤 慈雨
朝刊の小説母は立って読み	西宮市	森 泰祐
お年玉催促に来るお目出度う	河内長野市	森本黒天子
時間待損を承知の三本立	大阪市	堤 勝三
旅立ちへ母にまかせる借衣裳	西脇市	大江 秋月
身だしなみより未練なる髪を染め	西宮市	中田 春風
速達で二号おどかす手も使い	大阪市	中西兼治郎
前掛をはずせはずせも松の内	鳥取市	岩田八文銭
雨漏りの暮らしへ里から無心が来	玉島市	井上 旭峯
暗米に尺貫法が生き残り	大阪市	今西 生薑
性格が裏切られたと悪うとり	鳥取県	一生 無名
ご苦勞な山で死なせる子を育て	小杉市	筒井 吉枝
気心が知れて正座の座をくずし	倉吉市	渡辺 弘介
春場所を麦踏みながら携帯用	愛媛県	柳原三多楼
風上げに競う子供ら夢多し	大阪市	稻森けい女
霧の中電車ののろしんどころ	茨木市	高木繁太郎
マージャンは嫌い下積みでがまし	兵庫縣	斎藤たけお
味付も出来ないパパが文句云い	西宮市	山岡 半歩
テレビ正月などと新語をほめて	大阪市	西本 保夫
残り福貰い損ねてかぜを引き	堺市	武田軍治郎
娘の結婚		井石 悟朗



3 Sとは、スポーツ・スリルセックスのことであるそう。いまこの三つのSが巾を利かせて世をカッ歩していることはわかるような気がする。新聞をひろげて見ても、週刊誌のページを繰って見ても、この三つのSにあてはまるような記事ばかりである。

ここにこへ、もう一つSを食いこませたいものに、川柳のSがある。とにかく川柳ブームをつくらることが、われわれの使命である以上、いい川柳を作らねばならないと思う。しかしこれはなまやさしいことではない。といって他人まかせではダメである。やはり自分を上させねばならないのだ。



「にしなり」漫評

堀口塊人

はめるとべんちゃらになる。く

させばさらわれる。好きな句だけでは批評にならない。句集をいた

だく度ごとに、必ずといってよいほど、忌憚なき御批評を、求められるが、ほんとはそんな事が出来るものではない。

ろうとする、てらい、がない。まむし喰う口で寝め合う文五郎 玲人

まむし、という、大阪ことばが生きてはたっている。おじいちゃんとおばあちゃんかそれとも、おばはん同士か、そこまでははっきりしないが、その人柄がうかがわれ、文楽座の人形つかいをほめるのに、ふさわしい、ふんいき、を出している一句である。

お神輿の先を巡査は走らされ 玲人

と、共に、あむなげのない、しっかりと土台のある街の川柳人である。

つづいて同じ傾向の人に、伊達堰子さんがある。

先銭で半助一つ頼んどき 堰子

私は先ず三四人の好作家をみつめた。その一人は吾郷玲人さんである。この人の作品には世間話の味がある。それだけに、新らしが

鵜汀

野呂鵜汀さんの作品には、心理の影があり、心理描写の裏付がある。何でもないうで、心の深さ、が感じられる。将来性のある作家であると思う。

スタイルブックの上を春の風がすぎ 梅志

「春の風スタイルブックの上をすぎ」とすれば調子はなめらかになる。それに、わざわざ原句のような表現をしたのは、梅志さんに何かの、おもわく、があつての事であらう。「上を吹き」とせずに「上をすぎ」と描写したところにも老練さがうかがわれる。これに似て、

お早うさんと云うだけの初恋 淡海

にしても「初恋はお早うさんと云うただけ」とすれば調子がよくなるのに、わざと、ぎこちない表現にしたのは、それによって初恋のういういしさを出そうとしたのであらうか。

そろばんはびったり合って赤字なり 晃

「そろばん」とせず、「そろばんは」と「は」の一字こそ、この表現の中心である。そろばんの方はしっかりと合っているが、しかし、赤字である、と云う内容が「は」一字によって生かされている。

我儘な妻におどろく妻の里 漣

里に帰った妻は、もとの娘に戻って、わがままいっぱいに甘える。妻のそんな半面をみる事は、若い夫にとっておどろきである。

お歳暮をもって来たのに犬が吠え 歌子

落目という噂さの人が派手に来る

この二句共に女性の、せんさいな心、がはたっている。女性心理からでなければ生れない、男ではなかなか気のつかない、佳吟であると思う。

荷車のどこかでひよこ鳴いて 五色

居り

すててこのはき換えも持つ火事見舞 同

ところが、これは、女性にもおとらない、しみじみと味のある作品である。おそらく、この人は、いささかお人好しであらう。

浮雲ヘトンビくると輪をえがき 五色

にしても、その叙法は月並平凡であるにもかかわらず、明快な心境のあかるさ、がある。しかも「浮雲」によって「晴天」を表現するやり方は凡手ではない。

私の好みに合った句としては悟朗さんの「校門の」薫風子さんの「もう嘘を」凡九郎さんの「合

す手へ」句念坊さんの「先生も」
豆萩さんの「パンパンの」なども
まだまだ多い。しかし六百十五の中
で特別好きな一句は

ひろい屋が淡々として持って

行き

旅風

である。持って行った物は何であ
るか分からないが、「淡々とし
て」と云う形容がこれほどいや味
なくびつたりとあてはまる場合は
少ないと思う。ひろい屋のひろい

川柳歳時記 (7)

水谷竹莊

春の巻 (一)

春の味覚と川柳

陰曆二月始めの節氣を啓蟄（けいちつ）と呼び、陽曆では三月五日頃になる。

啓蟄とは地中の虫が這出る意味で、温暖の春が近づいたことを、なかなか面白く表現している。春分も二十四節氣の一つで俗に、暑い寒いも彼岸まで、といわれるように、陰曆の目盛りを示す大切な役目を負うた日である。

また三月三日は五節句の一つである上巳節句にあたり、桃の節句

屋そのものになりきって、はにかまず、わるびれず、さりげなき態度で、ゴミ箱の蓋をばたんとおとして去って行く姿が眼に見えるようである。

句会の意義は、などと、ひらきなあって論じなくても昭和三十三年に右の様な佳句が生れただけで、川柳にしなり句会の意義は充分であると思う。

とも呼ばれている。

五節句は明治六年一月の太政官布告で廃止が定められて以来、民間の祭りとしても自然におとろえたものもあるが、ひな祭は戦後いち早く復活し、ますます盛んになる模様である。さてこのように暦の上を覗いただけでも春の気配はいよいよ近く、俳句の季語にも、山笑う、水温む、などがあって寒さから開放されたものの動きが見えはじめてくる。

春が来たちに葉が出た銀杏の樹 三太郎
妻呼べば素直に立つて来る

も春

八重丸

浮かれたら何うだいと春訪れる 迷亭

雛の部屋雛のころは朱雲洞 久坊

ひな段をいちつて見たい男の子 木間暮

春が来ると米飯に青菜を炊きこんで風味で食べる菜飯というのがある。野草の嫩葉や、うこぎの若菜などを飯に炊きこむが、特に嫩菜飯は菊に似て幾分ほろにがい香

気があり、幼い時から食べなれたものには淡い郷愁が、よみがえってくる。ただあくの強い野草は、茹でてから炊きたての米飯に混ぜあわせた方がよい。その外にも、砂浜の防風、路傍のはこべ草、湿地のたねつけ花、畦道のたんぽぽ

土手の土筆など、食べられる春の草々である。
芽を数へ乍ら冷んやり土を踏み 柳葉
芽をつまみ疲れて春の陽にほてり かなめ

摘草へ誘はれている台所 舎人
郊外の梅へ母親海苔を巻き 草人

菜の花をかぞへて蝶々先へ行き 角恋坊
菜の花漬は春の漬物として喜ばれるものである。菜の花の穂を

つんで塩水で洗い、きつと熱湯に通して塩漬にして圧しをきかせる。一昼夜で花の色も鮮やかな漬物となる。辛子をだしてといった中に浸けた辛子漬も風味がある。

路のとう人裁く口誰れが持つ 仙坊

蕨のとうは蕨の苔（ツボミ）であって、雪を割って出るところに本当の香りがある。雪の少ない暖国産のものは一般に香りが浅く、熱海の蕨のとうは十二月から芽を吹くが、ほとんど香りがなく、芳香を賞味するものであるから、細かにセンに刻んで味噌汁の薬味や箸洗いの浮かしに使う、火に焙って煉味噌をつけたら、油でいためて薄味の醤油に浸すのもよい。

つくし持つて遅い使を叱られる 回天子
菜の花にアベツクいつか消えている 回天子

外は春よと嫂さんに起こされる ほか平
まだ冷える春を素足に味あわせ 柳児

雑草はせつなし菜種花さかり 梅志
摘草などという言葉のあるのは、日本ぐらゐのものではあるまいか、もし外国に同じような言葉があったとしても、それは草花を摘んで眺めたのしむ意味であって、日本のように食べるための、

セリやタンポポを摘む意味とは、おのずから異なるのである。

日本人は食べられる野草の種類を非常に多く知っているし、その料理法もよく研究しているのは、国土もせまく、昔から大飢饉の惨害をなめたけいけんにもよるのであらうと思われる。しかし日本人の食生活には多分に趣味的な面もあって、食糧の豊富な時でも山菜野草を探し歩くという、ほほえましい性格を持っていることも事実である。

川柳雑誌社でも、昔、西田草葉氏が居られた頃、野草を探し歩く川柳会が開かれた事もあった。そして僕も参加した、その時始めて潮花氏に逢った。また高橋がおるさんが和服で、つつましくすわって居られた事も、今はなつかしい昔の思い出となった。

ヒゲソリ後に

アストリンゼンは世界的常識!

- 1 生々した男性美をつくる
- 2 爽快でヒゲソリがたのしい
- 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

明色アストリンゼン

桃谷順天館



平將門 (上)

富士野鞍馬

桓武天皇の曾孫高望王は、「平」の姓を賜わって、民籍に下り、上総介になった。その子国香は、常陸大掾、良持(良將とした説もある)は鎮守府將軍であった。この良持の子が將門で、下総の国に広大な土地をもつ豪族であった。

將門は、若いころから京都

に出て、摂政大臣藤原忠平(時平の弟)の侍として仕えていたが、檢非違使を望んでなれなかったので国へ帰った。ところが、親族と仲がわるく、暴れ者のきらわれ者になっていた。

—伯父国香を攻殺—

承平五年(九三五)二月に常陸の平真樹と協力して出兵

將門は崩しの利かぬ紋所

(拾五)
放れ馬より騒がしい繋ぎ馬

(タル十九)
下総に繋いだ馬のやかましき

(七十二)
などと詠んでいる。

—新皇と自称—

將門は、下総国猿島郡の石井郷に居を定めて、王城と称し、自ら新皇と号して、左右大臣以下文武百官を任命し、親族や部下を関東諸国の国守に任じた。一説には、相馬郡守谷ともいわれ、「日本外史」もそれにしている。川柳も相馬説に従い、

相馬公家おつちさうな雲の上
(タル五・拾六)

相馬御所摂家になるは蔵司サ
(タル八)

十膳の食ひたおれば相馬也
(七九〇)

裾をふまれてはつんのめる相馬公卿
(七四七)

と詠んでいるが、また猿島郡を、

人の真似する猿島のえせ公卿

(タル九四)

という句もあり、將門の新皇ぶりを、

將門は朕が不徳とへらず口

(タル六・拾六)
繋ぎ馬口取りまでが百官名

(タル三八)
参内をしると国香を責める也

(七十六)
なんだ勅使だと国香腹を立ち

(七二二)
奏問々々と国香の状出し

(七十四)
下総の内裏紋からしてが下卑

(七二十)
下総でしりのつまらぬ難祭

(七二二)
などと川柳は揶揄している。

—將門謀叛—

承平八年(九三八)五月に天慶と改元、二月に、武蔵權守興世王、武蔵介源經基(清和源氏の祖)と、その国内足立郡の郡司武蔵武芝との間に、衝突が起ったのを、親分肌であった將門が仲裁して、事が治まり、仲直りの酒宴となったが、經基は、その席へ

本

福壽の

心斎橋筋大丸前
電話の三三四番

遅れたため、將門、興世、武芝の三人が結んで、自分を殺すのかと邪推して、京都に逃げ帰って、將門謀叛と、朝廷へ訴えた。將門は、この訴えに對して、主家である藤原忠平を通じて弁解して、その申開きはいれられた。

武蔵權守興世王は、新任の国守と争って、將門のもとに身を寄せていたが、「日本外史」にも「兇險にして乱を喜めり」とあるような人物で、將門を煽動して、「二国を討つも坂東八国を奪うも、その罪は同じである」とそそのかしたので、ここで將門は謀叛の決心を固めたのであった。

―天慶の乱―

ここに至って朝廷は、藤原忠文を征夷大將軍に任じ、天慶三年（九四〇）二月、將門追討の太政官符が、東海道、東山道に下された。その征討軍が到着しないうちに、国香の子貞盛が、下野の押領使藤原秀郷の協力を得て、將門を下野に破り、下総の国石井郷に追い詰めて、ついに將門を亡した。貞盛は、將門のイトコにあたり、後鎮守府將軍になった。世に「平將軍」といわれ、伊勢平氏の祖である。將門は偽宮、新皇の夢も東の國で亡びたのであった。

―藤原秀郷―

「日本外史」は次のように書いている。

「三年（天慶）朝廷は、參議藤原忠文を拜して、征夷大將軍となし、諸將を率いて東伐せしめ、而して貞盛を常陸掾に任じ、兵を發して將門を討たしめたまふ。將門はこれを聞き、兵を率いて貞盛を常陸に索むれども得ざりき。すな

わちその衆を散じ、独り千余人をひきいて下野に至る。押領使藤原秀郷有り、世々大族に往いてこれを見る。將門はまさに髪をくしけずりしが、モトドリをとりて出で、これに款接し、食を命じて共に食う。飯粒前に墮つ、拾うてこれを食いぬ。秀郷は輕卒にして共に為す有るに足らざるを知るや、すなわち、貞盛に従えり。」

この將門、秀郷の会見の様子を、川柳は見逃がさず、

秀郷はあたま見い／＼挨拶し

（拾四）

將門は愛想過ぎて見限られ

（タル二十・四三）

愛想のいいが將門落度なり

（廿二）

下総の馬に俵はつかぬなり

（廿四二）

親王づらでもあるめえと藤太

（廿四一）

てう／＼しい王だと秀郷はい

（傍三）

ひと詠んでいる。秀郷は俵藤太と称し、後鎮守府將軍になった。そして大正七年に正二位を贈られている。

・方言と川柳・

二 飛一驒二

東野 大八

―でござが あしなかな たにはんちくたい

お経の端くれみたいな文句だが、飛驒の高山にいけばりっぱに通用する。かんかちの飛驒の方言がこの句？の中に五つも入っているときいては、いかに単語の短かい外国語といえども頗るまけすること請合だらう。

まず「で」という接続詞用の一字が「農家の本座敷」ということである。「ござ」はゴネルという意味にとられやすいが「主人」ということである。「あしなかな」というのは女の子にきかせれば紅い顔をしようだがエロではない。「途中の儲け」という意である。用足しの途中や、物を動かす場合などの余徳を指すが、ブローカーの意味もある。「かたに」は担保ではなくて「全然」という意味である。「はんちくたい」とは高山の代表的方言の一つで「もどかし

い」とでもいった方がよろしかろう。だからひらかなだらけの上述の川柳句らしいものを意識すると「農家の奥でそこのおやじが、儲け話とてさっぱりちががあかないことをいっている」ということになる。勿論こんな川柳はあるわけがなく、私の創作。

こうしてみると山郷岐阜の山の奥の奥へいくと、チベットの外蒙並の難解な方言が存在しそうだ。とにかく方言川柳の面白さはその訳し方一つにあるが、それをその地方のただ中にとりあげるときまことに興味しんしんたるものがあり名句ともなる。

二 出雲二

尼 綠之助

べったりだんべったりだんちーた出らっしやい
毎度ありがとう、毎度ありがとう少しは出かけお寄りなさい。というのです。この場合非常に親近感が旺盛しているのです。

元来出雲は発音が悪い。方言と言ってもズーザー弁のあいまいさからやたらに不明瞭さを増してい

ます。

熊おじは向うどげだいかい
しきだ
くまおじということは私も知らない。これは方言ではないかも知れぬ。花札の場合くまおじを背にしているときくというのである。ついでいない時にはくまおじが横に居るとか、向っているとかならず駄目だと言ったような意味らしい。

それでこの句意は、くまおじは向い側に居るから勝負はどうにもこうにもさっぱりだ。

勿論くまおじなる體体のようなものは果してどこから言われているのか、敢てせんさくもしないので、これこそかいしきわかりませ

味のてー

モダン 川柳

心育橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 27 6684

御集会には階上御利用下さい



大万川柳あれこれ



—話す人—

須崎 豆秋
松江 梅里
編集局 不二田 一三夫

「一三夫—いよいよ33年度も「条件」で千秋楽になります。豆秋さんの横綱はもう決定的ですね。」

豆秋—いやあ、なかなかそうはいかん。二位の梅里さんとは一点一三夫さんとは一点半、春葉さんが二点、五位の水客さんで四点半という大接戦だから、この一回でどうひっくり返えるかわかったもんじやない。

梅里—豆秋さんは大丈夫だが、ぼくと一三夫さんは半点差だから、そこそこのなるか知れたもんじやないですよ。

一三夫—ぼくなんか、三位にいるというのが大番狂わせなんです。から、こんなの、数のうちにはいつていませんよ。

梅里—と、口では言ってるが、豆秋、梅里何ものぞ、と顔にかいてある。(笑)

一三夫—なかなかどういたしまし。しかし約半年間、阿倍野支

部三人が三位までを死守してきましたので、何とか、もう一回だけこのままでゴール・インしたい野望はもっていますが、春葉さんに半点差と迫られ、水客さんに二点と追いこまれては、もう絶体絶命ですよ。

豆秋—その気持ちわかるね。ことしは大平トップに立たせてもらったが、僅少の差で追われている気持ち、あれ、イヤだな。ちょうど後方から、背中をチョイチョイと振かっているようで、気持ちのわるいことつたらないね。(笑)

一三夫—五位までで落ちるカモといえは、ぼくですからね。皆さんはぼくをカモにしています。

豆秋—エライ弱気だね。

あてこみは効かぬ

一三夫—どなたに聞いても、大万川柳は難中の難といわれていますが、第一回からのベテランである豆秋さんには、そのコツという

のがおありでしょうが、一つご披露願えませんか。

豆秋—大万川柳にはコツなんてものはないね。何しろ日本一の名選者としての路郎先生が選をされているので、こんどはこの句が天位になつたら、よしこの調子でゆけとやつたら全没になつてしまう。ぼくなんかを選をする、と滑稽なヤツを入れといたら豆秋め抜くやろ、とアテコマレるがこれではダメだ。ぼくなんか、もっとも選の勉強をしないと路郎先生に申しわけがない。

一三夫—あるベテランから聞いた話ですが、大万川柳をやると頭が痛くなるというのです。(笑)

梅里—どうして?

一三夫—苦吟何日間かして投句する。それが没になる。入選句を見て、ハハハここがわるいのだな、と反省して次回にはそのように作つて出すと、また没になる。こんなことをくり返している、こんどはどの句はだれを出そうかと迷つて、頭が痛くなる。というのです。

豆秋—そこですよ、先生の偉いところは。絶対あてこみはダメだということだ。

一三夫—先生がアト一回だから頑張るんだね、と激励してください。が、「条件」って題は、すぐに出来そうな題なのでベテラン諸氏にはかないませんと申上げたのです。すると先生は、すぐ出来る

という安易さがあるからえていて、自分の畠の句が没になる。と、実に百の柳書にまさる一言だと思ひました。

梅里—「よろめき」という題が出たとき、人もコレは梅里のものだと云うし、ぼく自身もそうだと思つていたところ、案に相違して全没だった。(笑)

豆秋—こしはちよっと調子がいいし、「主任」というのが出たときは、シメたと思つた。ここでグンと稼げるワイと思つていた。主任というのはゴク身近なことであるし、別に苦勞しなくても、自分の生活をそのまま句にしたらいとタカをくくつていたところさあどうだ全没や。(笑)

梅里—豆秋さんの「主任」にほくの「よろめき」が全没になったということは、いま一三夫さんが先生のお言葉をいわれたように自分の畠という安易さがイケなかったのだなと反省しています。

大安の日に投箱する

一三夫—十哲さんは、十三日に出すと縁起がよいと、毎月十三日にポストへ入れるそうですが、早い人や遅い人もあるでしょうね。

梅里—別に早い人、遅い人というのはないが、とにかく一句でも抜けたときはスグ送ってきますね、うれいからでしょう。なかには郵便では間に合わぬからといって電話で投句してくる人が、

ノイローゼをふっとばす

習慣性や副作用の心配がない 催眠鎮痛剤

ブロバリン

【健保適用】

30錠 60円 100錠 150円・医家用には粉末 25g〜

日本新薬株式会社

プロバリンはもちろん催眠剤ですが、又一方に於ては大脳皮質性の緩和な鎮静剤としても大へん広い用途を持っています。
例えは……最近話題のトランキライザー的な使用法もそのツ……
イライラ、ジリジリした時にいつも二三錠これで気分も落ち着いて夜も又安眠、という訳あまりクヨクヨせず、今晩はプロバリン錠で熟睡なさってください。

かならず毎月二、三人おられま
す。

豆秋—ぼくは十五日の切の一番
最後の大安の日にポストへ入れ
る。(笑)

一三夫—「主任」の時も大安でし
たか。

豆秋—いやアレは日がなくなっ
て、出した日は仏滅だった。(笑)
しかし「主任」ならこっちのモン
だと思っていたので、仏滅何事や
あらんとおもっていたのになあ。

(笑)

一三夫—豆秋さんは、何句ぐら
い作句して出されるのですか。

豆秋—まあ二十句内外だね。千
里君なんか五十句も作るそうだ。

梅里—ぼくの場合、早くからか
なり作っておくが、同じ着想の句
が来ると、ぼくのはうがウマイと
思っても、そこはやはり遠慮して
自分の句を引っこめる。ツライ場
合もありますね。

豆秋—梅里さんは作りにくいと思
いますよ。

一三夫—ぼくは時間的にいつも
追いまわられていますので、七、
八句出来たりうちから、五句出すの
ですから、そう自選に苦しみませ
んが、三十、五十句と作ると自選
が大変でしょうね。

梅里—自選ということばむずか
しいね。路郎先生はどの方でも、
ご自分の作品を発表されるとき
は、腹乃奥様に選をさせていただく
ときもあるそうです。

柳界の異色

梅里—東京の高志さんは、自分
の句が抜けると、わざわざ東京
から見に来るという熱心さです。

また岡山のある人は発表まで待ち
きれず、長距離電話で聞かしてくる。

豆秋—二十日すぎになると、ち
よっと腹がへつても、すしを食べ
て大万へよう入らんのです。没か
どうかと思うとコワイので。(笑)

梅里—そんなこと言うてもうて
は商売がなり立ちまへんがな。

(笑)

豆秋—十悟さんと腰子さんは、
どちらか抜けたほうが、すし代を
払うことにしています。だからオ
ゴるほうは「きようのすしは、え
え味にできて」とはめる。(笑)

没になったほうは「きようのはま
ずい」と言う。(笑)

梅里—そりやムチャや。(笑)

一三夫—ふあうすと川柳社の徳
三さんの名が見えませんが。

梅里—三十四年度からまたやら
れるそうです。番華の万楽さんと
共に強敵だから油断はできない。

豆秋—それぞれ柳派をこえて、
路郎先生の選を募って投句すると
こに、大万川柳会のいいところがあ
る。ぼくは、これは日本一の激戦
柳壇だと思ふな。

梅里—路郎先生のおかげです。

豆秋—たしかに日本柳界の異色
だよ。

一三夫—もう八年だそうです
が、第一回からの人で今なお続け
ておられるのは？

梅里—豆秋さん、岡山の十九平
さん、満佐志さんは、八年間、た
だの一回も休まず投句されています。

豆秋—句が年々によくなってい
たことは、これは路郎先生の指導
力のたまものだね。

新人の進出

一三夫—路郎先生の厳選にな
ら、没なんかすこしも恥かしいと
は思いませんが、なかには連没で
あきらめてしまう人もあるでしょ
うね。

梅里—なんでもそうだが、辛抱
と勉強がないとダメだと思うな。

一三夫—ぼくのような無名の新
人が、ことしで三年連続ベスト・
テンに入れてもらったのですが、
こんな新米に負けてはおれんと、
先輩方のいい刺戟になるのではな
いでしょうか。

豆秋—薫風子さんのベスト・テ
ンもほぼ決定だと思うが、やはり
新顔がベスト・テンへ突入してく
るといことは、たしかにわれわ
れにも刺戟になる。その意味で新
人の進出は大いに歓迎するね。こ
としはちょっとムリかも知れんが
二十位(二月初旬現在)の阿茶さ
んの三十四年度における活躍は期
待できる。

梅里—あの人は熱心だからな。

一三夫—句の巾のひろい人です
ね。

梅里—文秋さんが一三夫さんの
着想には感心すると言っていた。

一三夫—ぼくなんかのはマダレ
ですよ。先生がよく言われるので
すが、標語のクセが句に出るから
ダメだと。

三十四年度の予想は

一三夫—本年度の予想はどうで
しょう。

梅里—一応は第五位までは大丈夫
だと思いますね。五位以下は、と
いってもいずれも強豪ぞろいで、
一人一人の雅号を見てゆけばみん
なベスト・テン級だし、これだけ
は神様でもわかるまい。

豆秋—阿茶さんは入ってくる
ね。

一三夫—豆秋さんや、梅里さん
は大地を打つ槌が外れても、絶対
外れっこがない。

梅里—そうほうまくいかん、兄
の好郎をこらんなさい、昨年あれ
だけ圧勝したのに、今月で三回連
没だ。

一三夫—オヤ休んでおられたの
とはちがうのですか。

梅里—やっていますよ。

一三夫—そうですか、あれほど
の人になると、句が出ないと休ん
でおられるのかと思われるが、ほ
くなんか休んでいても没に
みられるから、ツイ休めなくなる
エライちがいですな。この記事の
校正が出るころにはもう三十三
年度のベスト・テンが決っています
が、お二人の横綱不動を祈って、
ではこのへんで。(節分の日)

神経痛・リウマチに...

西独クノール社より新輸入



オサドリン錠は西独クノール社が多年
研究の結果、新発見した神経痛・リウ
マチ治療剤です。その作用は確実で
胃腸障害などの心配がありません。
(10錠) 350円・(20錠) 650円

オサドリン錠



入門講座

研究題「餅ばら」

戸田古方

最初に今年からはじめたという姫路の、植村客遊子さんの句を御紹介して、他の方の句を引合に出しながら研究してまいりましょう

A 年賀から戻り餅ばらいたわられ

B 餅ばらを初風呂へ来てまぎらわ

C 餅ばらへ初出の昼を胃散のむ

D 餅こなす首聴いたのか聴診器

E 餅ばらで三本立を二回もみどなたにも経験のあることながら、餅ばらははらにつかえて持余す。句境がせまいといいますが、この方の句もみなそうだったところを句にしていられます。遂には薬や医者、そしてAはその一手手前というところ、このAは他人にいたわられるとも、自分にいたわられるとも見られます。だが「戻り」とありますので他人家族と見

る方が自然で、餅ばらでこまっている人は喰気のさかな若い人に見える。

聴診器に消化音がきこえるかどうかは知りませんが、事実とはとにかく、想像の世界であり、こういうところを純化させると詩がうまれそうです。

Cには類句が少しありました。

F もち腹へ今度は胃散送りこみ

G まだ食う気餅ばらさすり胃散もち

H オブラート尋ねる餅の腹加減

I 餅ばらへ古い胃散が持ち出され

CもふくめF G H Iとも佳句というほどのものはありませんが、まあ、そのうちでFは又もちかと胃袋が思っているところへ胃散が入ってきたとくさきり気なくいつているところに一寸面白味を感じます。Iの古い胃散は想とし

ては新しくはありませんが、ややとのっています。

次はBですが下五の「まぎらわせ」は素直に「まぎらせる」位の方がよろしい。この句も餅ばらをもてあましている句ですが、これとすっかり似た句はありませんので、風呂ではあらをしをするかわりにねる句を

J ああおいしかったと餅ばら横になり

K 餅ばらをかえひねもす寝てしま

L 感動もなく餅ばらはコタツに居

M 餅ばらで一食抜いて寝正月

斗病中の一鶴さんは餅ばらでこまっているよりあこがれていられます。したがって下五の「横になり」は軽くひびきます。老巧静観堂さんの上五の「感動もなく」はさすが、句境も静かにおちついていいます。連用形の「居(旧仮名のる)」留めは大へんむつかしく濫用しない方がよいのですが、この句ではそれとちゃんとおちついて

すませ

P 餅ばらでラッシュアワーを押しかえし

登

Q 餅ばらが気軽に帯持ってくれ

歌子

R 餅ばらへどうにもならぬ子が一人

豊年

S 餅ばらは何処へ行ったか出たまんま

真奇

餅ばらの効用とでもいいますか、餅ばらをたのしんでいるのがみえます。Oの下五「餅ですませ」、これは下六になっていますが、簡単に餅ですませたにはちがいありませんが、そのすませた感じに「餅にする」としても出ます。Pは又勇敢な餅ばらです。押さずに御願に願いたくとも自然なふくれた餅ばらが押してしまつたのかもしれない。太鼓腹のわたしには同感されます。Qは女の方らしくめったに帯などもつけてくれない夫が、手伝ってくれるうれしさ、餅腹への感謝とでもいいますか、うれしくなって来ます。Rは調子にのって喰べたのでしようか、さすが元氣な子供も弱っているのではありません。上五の「へ」は「が」とした方が自然なようです。Sは大人とも子供とも見られます。子供にした方が明るく健康なようです。

V 餅ばらで来たと飲むだけ飲んで去に

保夫

この三句は客遊子さんの句とむすびつけるのもどうかと思ったのでのこしたのですが、いずれも可成の出来ばえのように思われます。Tの八九寸さんの句、別にどうということもない、ただ犬をつれて餅ばらではらのつかえたのをすかしに出たというだけです、少しもたくまないたくみ、川柳は詩です。理屈ではないのです、樺太犬のジロー、タローではないが、犬におつき合しているうちに胃のもたれも自然に解消しようというものです。Uはもたれることばもたれているのでしようが「まあおひとつ」とすすめられるとそこは女性、ぐちゃぐちゃいいながらやっぱりいただいてしまったのでしよう。

Vはまことに心臓の強い句です。酒のみはいじぎたないと申しますが、又そのいじぎたなきが酒のみの生命とでも申しますか、餅と酒とはいはるところがちがうとか何とかいって充分に頂戴するまで御みこしを上げようとしな

い。春らしい句です。ただ酒はのむなうってそんな野暮なことはいっことなしにしましょう。

研究題「折鶴」

〆切 三月十五日

発表 五月号予定

投句先 豊中市本町三丁目二〇一

戸田古方宛

昨年の大会はオンソソウ諏訪の森の中島小石理事長のお宅で開催されましたが、本年は阿倍野区松崎町の梅里氏のお店「大万」でわが川雑婦人友の会の総会が開かれました。

1月25日の天気予報は雨とありましたが、昨年の大会は婦えりが雨でした。副主幹中島生々庵先生は雨と関係があることを、いつかの雑誌で拝見しましたが、きょうはその予報をくつがえて、暖かい新春の陽ざしが会場をやわらかく包んでくれました。



(中央左から阿茶・蘭乃・良子・知恵美諸氏)

女ばかりの川柳大会

——川雑婦人友の会総会——

ぐ身につく作句上のありがたいお話でございました。小石理事長はご病気で欠席されましたが、生々庵先生は毎年のようにご出席くださいまして、わたくしたちをあたたい目で、その生長を元気づけてくださいました。

川雑婦人友の会が名実共に日本一であることは、路郎先生という慈父と、川柳の母である霞乃先生をいただき、不朽洞会という立派なお兄様のあることです。この恵まれた環境に育つわたくしたちは、勉強という二字をもって、そのご恩にむくいなければならぬと思います。

会場で隣りに坐っておられる方、どこかでお目にかかったのにと、よく考えてみますと「女流作家訪問記」のお写真でご承知申上げていました岡山の知恵美さんでした。わたくし、知恵美さんファンのだけに楽しさ一としおでした。

毎月本社句会で、パスの披露ばかり聞かされていただけに、きょうのソプラノの披露は、二月号の記事にあるように正に「女護ガ島」でございます。

清水一家の清子さんが司会で大活躍されていましたが、その成績も優秀で天2、地1、人1というお見事なものでございました。おかげでわたくしも兼題「五時」で地質を得ましたが清子さんが羨や

ましく思いました。これは日頃の精励の成果と深く感じました。兼、席題が終って、お膳が出るまでの時間に、本社の新春句会で録音された、句集三人のテープ・レコーダーが回ります。

路郎先生のお声が流れて出ます。水客・紫香・潮花みなさんへよろこびの言葉です。新春句会に出席した方は、あの日の楽しさをもう一度、目に浮べます。欠席された方は、録音されたその中の笑声や、拍手の音でその日の盛会



前列左から阿茶・蘭乃・生々庵・清子・中列左から登志子・良子・花代子・花奈女・葉乙女・一栄・後列左から阿茶・蘭乃・優子・徳子・白美・知恵美・一三夫の諸氏

が想像され、路郎先生が潮花さんの句について、「ほくは恋というものを知らせんがね」というくだりは、この会場でも拍手がまき起りました。

トリオ共演になる「一本刀士俵入」の潮花さんのお声は、わたくしたちよりやさしいとは女性みなさまの述懐でございました。水客さんのお角力さんの声は可愛い声でした。どなたかが「あの時はお腹が空いているお角力さんだから実感が出てる」と、ほめておられました。紫香さんの「木曾節」には一せいに拍手です。

自己紹介はなかなか好評でした。柳歴に職業入りとあって、いっそう親しさが増し、楽しいものでした。かくし芸も一人二芸ですが天理の花奈女さんは多芸な方だけに順番を待つのがもどかしそうでした。

良子さん、一栄さん、吟女さんというめずらしい方々の舞踊もあって、潮花師匠、今夏はゆかた会が出来るとうれしそうでした。阿茶さんの、路郎先生の句入り「檜さび」が「フイナール」を飾りました。

(カメラ・村山静修)
(ペン・川島葉乙女)



好きな小鳥

——春琴抄の大谷崎が
小鳥の話を聞きに来た——

山川 阿茶

私は子供の頃から小鳥が好きである。殊に啼く鳥が好き。しかし愛鳥家ではないと思う。何故なら小鳥の自由を束縛して籠に入れ啼き声を楽しむだけで世話を少しもしない。買うのは父で世話するのは下男や女中で母が指導してゆく「お前のような無精者には小鳥なんか性に合はん剥製にしとけ」と父によく云われたものであるが、剥製では啼いてくれぬのでノーサンキューである。罹災後は家も狭いし人手も少くなり、人間の餌に追いまわされてる生活で小鳥どころではないが、ゆきすりの小鳥の声には足を止め耳をかたむける。前には二十種近く教も二百匹以上も飼ってあって「九官の先生」「おととの先生」「淡路町の鶯の啼いてる家」で通ってあった。春琴抄

の中に二三頁小鳥の事が書いてあるが、あれは谷崎さんがわざわざ私の処へききに來られて書かれたものである。

なる卵の黄味、ボレイ（かきの貝殻の焼いたもの）をやる。一方すり餌ものは鶯、駒、赤ひげ、雲雀、山雀、九官、目白、頬白等で

鶯はホーホケキョーと所謂谷渡りのケキョケキョをつづける啼声、これはどんな鶯でも啼く。しかし価値は高音によってきまるので専門家に云わすとなかなかむづかしい。ホーキ、イ、イ、ベカコンと云うように高い調子で啼く。この節まわし、声の大小、声の艶、き

ずの有無で鶯の値打がちがつてくる。高音ばかり啼いてもいけない。ホーホケキョーとの混合率も問題になる、又啼き声の調子は大阪、名古屋、東北等と多少違うようである。止り木に止って啼くのでは駄目で、飛びながら啼く方が力強い元気な声が出る。ホーでやめてしまふのを「吹き」とか「吹く」と云い、ホーが飛ぶのを「飛ぶ」とか云っておるようである。鶯にも声量のないのや音痴もあらうし、啼きぞこないもあらう。あの風影の上らぬ貧弱な体でよくあれだけの声が出るものだと感心する。市中でも半町位は充分声が通る。陰気な所が好きだから鳥籠に入れたものを猶長方形の桐の箱に一方障子の入った飼桶こおけに入れてお

る。栗俣、きび、菜種等を混じしたもの、これに青菜と木、産卵期に

鶯

小鳥の冷汗物語やら天狗物語を書く前にざっと総論めいた事を述べて見るとまず小鳥には色彩の美しいもの或は姿のよいのを愛玩するもの、例えば種々のインコ類、カナリヤ類、ルリ、マメ、文鳥、紅雀、しっぽう等一方唄声を愛玩する鳥としては鶯、雲雀、赤ひげ、駒、ローラカナリヤ、マメ、九官鳥、頬白等、又餌からわけると、まき餌物と、すり餌ものと云う事になる。まき餌ものにはカナリヤ類、セキセイ、十姉妹、文鳥、紅雀など洋種のものが多いようである。栗俣、きび、菜種等を混じしたもの、これに青菜と木、産卵期に

白粉と鰯粉を大根の葉を摺った汁で練る、これに時々蜂の子や虫類をやる。白粉は人間の御飯のようなもので、米、大豆を煎って粉にしたもの。鰯粉は鰯や小魚を干して粉にしたもので、鰯粉三に白粉七なれば三分の餌になる。これは面倒だし暑い頃は腐敗するので一日二回作る。鳥と云っても人間と同じ事で、含木炭素と脂肪と蛋白質とミネラルとビタミンを食事として摂るわけで、この外糞の掃除に行水、時々爪を切つてやる。冬は炭酸瓦斯の出ない温房をしてやらねばならぬ。相当の手間である。

ホーキベカでコが飛ぶと「尻切れ」とか云っておるようである。鶯にも声量のないのや音痴もあらうし、啼きぞこないもあらう。あの風影の上らぬ貧弱な体でよくあれだけの声が出るものだと感心する。市中でも半町位は充分声が通る。陰気な所が好きだから鳥籠に入れたものを猶長方形の桐の箱に一方障子の入った飼桶こおけに入れてお

最も新しい薬理に基づいた代表的な鎮咳剤で鎮咳と祛痰且つ鎮静効果をもたえ無毒性で迅速に奏効し効果の持続は数時間に及びます

鎮咳 痰 鎮 静

非麻薬・無毒性

INABATA

咳に

ファストシルS 注

【包装】2cc×10A・50A
販売元 稲畑産業株式会社 大阪市東区道修町2

私の念願

杉本 一 鶴

く。正月に啼かすために十二月中頃から灯を入れる、即ち鶯をベテんにかける、夕方から三十分四十分一時間と云うように灯を入れ明るくする。すると鶯が日が永くなった春が近くなったのだと思ひ啼く練習をする。初めは声も小さく節もとぎれとぎれだがだんだん本調子になってくる。餌は五分から七分位の強いもので寒くても行水は天氣のよい暖かい日にさせてやる。鶯の雛にさし餌して育て、子供が小学中学大学と進学するように次々とよい鶯につけて啼く練習をさせる。毎日箱に入れて師匠の所へつれて行って声をきかす、帰えつて来ると一生懸命練習してやるが、なかなかよい鶯は出来にくいものである。今迄失敗つづけ、一度もよい鶯なんか出来た事はない。よい鶯をもつておるとこの月謝で相当の金が入るのだそうである。又啼き合わせ会即ちコンクール等には天狗どもが愛鳥を抱えて来て半日を楽しんでゐる。

さし餌した小鳥手に乗り肩に乗り
阿茶

金 泥 集

選 乃 蔭 生 麻

課題 「白足袋」

白足袋に商売柄も身につきし	若菜	白足袋を履いて心もひきしまり	玉枝	白足袋の履き替えもあり母の旅	雅佐女
白足袋の芸人らしい歩の運び	清子	白足袋へ自動車はねを遠慮せず	風の子	白い足袋御前様だと云う姿	女
下駄ぬいで花緒の型が足袋を染め	白美	白足袋を洗うてかますと母に借り	カネ女	白足袋の子がねむりだす山車の上	そと枝
下車近くつて白足袋はき替える	あやめ	白足袋をはき替え炊事忙しく	登志子	白足袋をはけばボリスも女にて	知恵美
歌舞伎座出る白足袋の街は雨	万女	白足袋もクリーニングへ出している芸者	美喜	白足袋のよこれも見せず困わて	友子
白足袋のお下りつづる女中部屋	とよ	白足袋が爪立ち歩く楽屋裏	美音子	嫁の荷を待つ白足袋へ黄昏れる	きさ子
白足袋で来てスリッパのいる洋間	花代子	白足袋の裏が気になるお茶の会	たつよ	あかぎれを白足袋包んだ晴衣装	明美
白足袋の今日はふだんのババでなし	富士子	神主の白足袋今日もまだよこれ	周甫	白足袋へスリッパはしい宝物館	一米
白足袋をはいてのれんを守り抜き	陽子	白足袋の白さも主婦の嬉しい日	都詩子	白足袋に芸一筋の命かけ	ツユ
雲行きへ女白足袋ぬぐ支度	葉乙女	白足袋の足の運びもお茶の席	小菊	外またの娘の白足袋が案じられ	春栄
		白扇を舞う白足袋を用意する	阿茶	白足袋へイニシャル要る姉妹	蔭乃

度いと思ひます。

なぜなれば当千石荘でも私如き

若輩が、足許にも及ばぬ体温川柳

会健在なりし頃の生え抜きのベテ

ランが多くさん居りながら、一時

の身体の不調から作句をおこたり

それだけ空白が出来足ふみをして

しまひます。

さすれば今度は仲々作句のチャ

ンスがつかめずするずと日が経

つにつれ完全に川柳から遠のいた

感も見うけられ、あれだけ近作柳

樽をにぎわしていた体温の柳人は

只若輩者の私一人を残すのみとは

何んと云つてもさびしい限りで

す。(身体が大切か川柳が大事か)

命あつての全である事は云う

までもありませんが、何を一つや

つてもその事に全力をかたむけ情

熱とはこりを持たねば大成は出来

ないと思つて居ります。

昨春梅里先生より頂いたお便り

にあった

精出せば凍るひまなき水車

成程とつくづく思ひます。

療養生活が長くなればなる程、

人にも話せぬ家庭の苦しみや、病

状が悪くなればなつたで悲しい思

いをするのも人情とは思ひます

が、私は川柳のお蔭でベッドにし

ばられても退屈するひまもない程

作句に追われる事を喜びとし悲し

みをも句にぶつけて居りますので

作句をおこたる事など考えられず

その点救われています。

私は私なりに川柳を心の糧とし

て少しでも人間的価値を養ひ、こ

の病に終止符を打つべく良き伴侶

として今後共に連続投句だけはし

て行きたいと只々念願して居りま

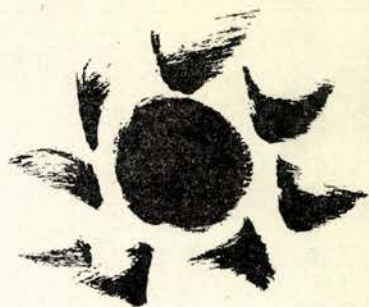
雅号由来記

佐野 ト 占

大正八年頃から生れ京都府河原町の寺町にある藤原家ゆかりの寺、臨福寺の一室で漢文を教わつていた頃俳句、狂句、狂歌等の作り方の手ほどきも受けておりましたので俳句の号、漢詩の号、狂句、狂歌、の号とそれぞれ老先生よりつけて頂いたものを川柳の号として今日使用しております、ト占とはどちらもうらなりとも通じますが占はかえると云いますので自らトつて占めをかえると云ふ趣より出たものと思ひます。

時々易者と間違えらるるので手相位は見ても上げましよう云々と、美人の手を握る余得もあります。後で化の皮がはけて可笑いになります。

す。
吾れなりに悟り開いて臥るベッ
ド



印鑑

土井文蝶選



一路集

印鑑は金の指輪を軽くおし 周甫
庶務へ印預けて離職の旅へ発ち 白溪子
配達を待たせていらつ印探し 万女
持回り印鑑の数だけ歩るかされ 笑太
朱肉をたっぶりつけた保証印 白帆
印鑑の空席もある書が廻り 南牛史
印相に叶うてるのに芽が出ない 八九寸
出生へ初めて父としての印 同
印押して昨夜の虎を貰い下げ 保美
給料日だけに判こが要る給仕 恒雄
印鑑を捺せば書類が四角張り 旅風
印鑑の任せる部下の無い社長 同
書留へ手問取る判を引たくり 夜潮
劇薬を買うに三文判を買い 蜻蛉
印かんを別に後妻の貯金帖 陽子

盲判だから汚職の知恵がつき 萊春
印鑑を押して他人の仲となり 雄々
実印を逆さに押して気がつかず 宗太郎
金を借る印鑑掃除行き届き 井蛙
通信簿肩身の狭い判を捺し 同
飲まされて捺した印鑑とは言えず 藤波
はんこ押すだけに豪華な廻り椅子 恵二朗
蔵書印大きく押して読みもせず 同
新聞を読み読み社長印を押し 虹要
印鑑の代りに拇印でけりがつき 繁太郎
三文判母は大事に鈴をつけ 俊見
印鑑は斜め社長の癖と知り 春雄
事務初め印鑑掃除だけですみ 慈雨
命より大事な印をこっそり 東二
印鑑にもう用の無い貯金帖 代仕男
社長印預りどんと来いの意気 章道
書留へこもも印鑑さがす家 むじな
印鑑たのむとこがない程借りており 愛鳩
証文の判のうすさが気に入らず 一声

印鑑の洩れを検簿の眼がきつい 九呂平
印鑑と顔七三に見て戻し 同
三文判でいい代書の知恵を借り 夢路
官印の大きな辞令の格をつけ 十九平
印鑑をがっちり握って父達者 一鶴
印鑑を押して会議をすばらせる 鳴枕
印鑑が逆立してる出勤簿 初甫
実印を二号預る程になり 実男
今日もまた機械の様に印を捺し どんたく
ベタベタと押して書類がまた戻り みのる
始末書へ代書三文判を出し 淀月
同姓の署名へ印は換えて押し 敏子
本人でも駄目印鑑が物を言い 白葩
印鑑が違うと通帳見せられる 岳詩
うやうやしく袋から出す保証印 豊年
お百度を踏ませ印鑑一つ押し 保夫
書記の閑印鑑の埃針でとり 光郎
許可印へ矢印あちこち廻らされ 同
三文判押してお顔を立てておき 牧人
印鑑を忘れ我家へ二里帰り 隆夫
丸四角のはんこ並んだ総辞職 麿光
恐縮をして印鑑を押し違い 一傘
水晶の実印金を借りるだけ 旭峯
履歴書へ右相違なく印を押し 朱紅
保証人としての印鑑ものを言い 雄声
判押したばかり後々までたり 蘭
同姓の印鑑借りて間に合わせ 美音子
越境の寄附へ父兄の軽い判 生薑

為替です印鑑渡す手が躍り 吉枝
有難く約手の判をにらんで見 東岸
だまされてから印鑑を大事がり 兼治郎
事故が出て印鑑照合念が入り 漫歩
印鑑を捺して社長はもう帰り 忠三
不渡りを出して印相氣にしだし 圭井堂
新会社先ず印鑑が派手に出来 不二

住

印鑑と別居させとく預金帖 卯之助
印鑑と顔見くらべて念を押し 参無子
請判のこわさ借家へ落ちたまま 宵明
へそくっている印鑑は別に持ち 牧人
小切手帳はあるが印鑑旅行中 不二
実印は迷路のように彫られたり 太路

軸

手土産

大鶴喜由選

手土産について茶の間へ子供行き 白溪子
手土産を出して実のは用があり 木魚
手土産を倍にして来る里帰り 笑太
手土産に母は持たいたい物ばかり 周甫
履歴書は返され土産だけ取られ 虹要
山の幸匂う手土産友の老け 恵二朗
手土産を戴だく迄はかしこまり 繁太郎
手土産のある間は孫も抱かれに米 参無子

ボーナスが出て手土産も久し振り 恒雄
 手土産に鶏がそのまま包まれる 三舟
 手土産が無いので小供遊びに出 夜潮
 手土産へお手手をつけて礼が言え 蜻蛉
 手土産を渡すチャンスが見つからず 幽谷
 手土産が小さな野心持つて来る 春雄
 手土産の高でもてなし変るなり 雄声
 手土産を包む風呂敷柄をより 陽子
 手土産で来て一升差して空け 一休
 手土産で俺誤魔化すつもりかえ 鶴汀
 手土産はどうやら事前の匂いがし 真奇
 手土産が内の五票へ目をつけた 鈍愚坊
 手土産の値踏みデパートのぞいて見 秀三
 一升も飲まれ手土産まで持たせ 一鶴
 手土産は取られ頼みは断られ 晃康
 手土産のないのが隅に小さくいる 初甫
 里帰りえびで鯛釣る土産さげ どんたく
 はよ去なんかいな土産へ子は待ち みのる
 手土産の代り小遣そとやり 敏子
 手土産を上の子までが来ていじり 一傘
 手土産もわりかん新婚襲われる 牧人
 手土産を好かぬ人から届けられ 進之助
 手土産と早合点したのに慌て 寒男
 手土産で詫びに来たのを又叱り 光郎
 手土産を振り分けにして国の母 生薑
 手土産が裏から這入る狭い門 旭峯
 手土産を見て一升の封を切り 雄々
 手土産の手前聞くだけ聞いてやり 宗太郎

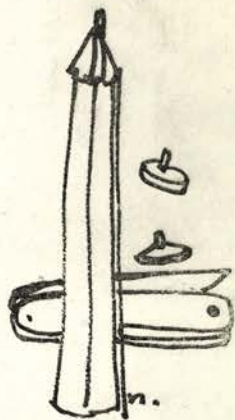
手土産の太子に入学やと出来 慈雨
 気やすさが手土産膳にそそぐ出し 俊見
 手土産の餅へ一日待てという 太路
 手土産に無沙汰の詫びもこもるなり 吉枝
 フラフープやめて手土産査察に来 不二
 手土産のいるいらないで夫婦もめ 白帆
 手土産は交換に来た仕儀となり 八九寸
 応接へ末子手土産食べながら 同
 手土産が泥んこで着く千鳥足 萊春
 食べながら見る手土産の包装紙 同
 佳
 手土産で先ず奥さんを攻め落し 保美
 あと腹がにが手土産とも知らず 幽谷
 手土産の中味が隅の隅へ寄り 鶴汀
 手土産の中味おさえて考える 庸佑
 手土産はなんであらうと母うれし 岳詩
 手土産を持って実家へ泣きに行き 兼治郎
 こんど来る土産を孫と約束し 一声
 金策に出る手土産は深く抱き 代仕男
 大根を提げて女中の親が来る 圭井堂
 名刺がわり何か気になる匂いがし 万女
 人
 手土産と並んで無沙汰詫びている 昌男
 地
 手土産へ子心となる故郷の味 不二
 天
 手土産も無いうらぶれをもてなされ 万女
 軸

上役

田垣方大選

手土産が彼奴は話せる男にし
 クラブ磨く時間も上役持ち合わせ 一鶴
 切り上げの早い上役よろこばれ 漫歩
 上役へ黒を持たせて待つてやり どんたく
 土壇場で上役逃げる事を知り 魅光
 上役もラッシュアワーでもまわて居 蘭
 上役の或日孤独を感じとり 岳詩
 結局は上役任せになるブラン 夢路
 上役の賀状四五日頃に来る 遠二
 お上手を言う上役で油断せず 代仕男
 上役の汚職下っぱかぶされる 庸佑
 上役のさる暮へ公休フイにする 井蛙
 上役を入れて片袖雨に濡れ 同
 上役のおごりは高の知れたもの 東岸
 上役の残業吸がらただけ 昌男
 上役の夫人の方が威張ったり 陽子
 上役が何だと思ふ日もありき 真奇
 上役に嘘つく事も教えられ 鳴枕
 上役の機嫌あつさり判を呉れ 牧人
 靴すべりまで上役へゆずるなり 淀月
 初夢は上役殿ったとも言えず 敏子
 上役の噂上役ひよっこり来 九呂平
 屋上へ来て上役をけなし合い 一休
 半年のことで上役顔をされ 幽谷
 上役に可愛がられてそねまれる 蜻蛉
 ねんねこで居る上役の日曜日 虹要
 上役に白を渡して気苦勞な 周甫
 退職をしたのに上役顔で来る 十九平
 上役に呼ばれて来れば皆なの腫 藤波
 上役を凌ぐ履歴が邪魔になり 藤波
 上役も一つ上に押えられ 句念坊
 上役に飲まされみんな喋つて来 庸佑
 上役のスリッパちつとも破れない 夜潮
 上役へ言いたい事を酔うて言い むじな
 下っ端の頃は上役語るなり 雄声
 社外でもやはり上役面をされ 保夫
 上役を済ませて家の餅をつき 愛鳩
 上役のあんな笑顔は社で見せず 古心
 佳
 実にいい上役でしたころり死に 不二
 上役の私用も入れて八時間 白帆
 上役の方が碁盤を運んで来 幽谷
 上役も酔えば話せる顔になり 旅風
 上役が居るのですけう切る電話 真奇
 壁に耳あり上役にすぐわかり 雄々
 上役の愚痴もやっぱり金のこと 忠三
 人
 上役の飽もちたい顔ばかり 恵二朗
 地
 上役に近い座席はゆずり合い 美音子
 天
 子の話して上役もたあいなし 保美

柳界展望



句会

▼本社三月句会は七日(土)午後六時から道頓堀文楽座別館四階で開催される。大阪の中心街へ進出する本社句会の第一歩を一層意義あらしめるよう多数御出席願いたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)句会は二月十七日午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院上で開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は二月二十日午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪通信病院川柳会は二月二十一日午後二時から五階会議室で開催。

▼東京観光川柳研究会句会が三月八日午後五時から港区芝新橋六ノ六六伊藤路天居で開催される。宿題「効果」「八方美人」「足」各三句。▼きやある句会(静岡市)は三月八日教覚寺で開催。「壁」和夫選「三月の生活」虚舟選、「S・O・S」竹林選各五句。▼柳樽寺川柳会(東京都)では四月が故井上信子女史の命月に相当するので鎌倉の葉前句会を開催されると。▼岸和田川柳社句会が三月十一日午後六時から宮本町会館で開催される。兼題「仮面」「息切れ」「泣き虫」各三句。▼新潟市川柳大会は三月八日(日)正午から開催。兼題「赤字・金星・住込・無器量各題二句以内投句は新潟市西港町三渡辺告木宛。▼第二回国鉄松任工場川柳大会は二月二十日午後六時から同工場第一会議室で開催。▼川維備前支部句会(岡山県)は二月十四日に竜泉居

で開催された。▼竹原川柳会句会は二月七日石崎佐舟氏結婚祝賀を兼ねて同氏宅で開催。

▼川維倉敷支部句会二月八日開催。▼岡山電報局句会二月十一日江国幽谷居で開催。▼川維下関支部句会二月十五日下午関駅会議室で開催。▼川維岡山支部句会二月十四日に日赤岡山支部で開催された。▼川柳噴煙吟社(熊本)句会三月十日午後六時から大江町交通局職員寮で開催。兼題「試験」「ゴルフ」「帽子」投句先大江新町七五辻謙三郎氏宛。▼広島川柳会の三月句会十四日午後六時から広島駅二階会議室で開催。「旅の雨・麦・酒のいろいろ(各三句)」投句先は鷹匠町六五同会宛。

消息

▼路郎主幹は二月九日午後五時半から大阪郵政会館で開催された関西短詩文学連盟総会に出席、同連盟理事長に再選された。▼牟田一哲氏(大阪市)は一月二日から親子三人で山陰の旅を楽しまれ、「反射鏡なしで三朝の酒を酌み」の句を寄せられた。▼若木多久志氏(西宮市)は大阪自動車会館内オート倶楽部の川柳委員に就任され、機関誌「オート倶楽部」に「新春のつれづれ」と題して川柳を紹介された。▼野尻弘氏(大阪

市)の個展は二月三日から八日まで六日

間、大阪梅田阪急百貨店で開かれた。氏

は本誌表紙絵でおなじみの。▼東野大八氏(美濃加

茂市)は一月十五日岐阜タ

イムス美濃加茂支局長に栄転された。(美濃加茂市太田町岐阜タ

イムス美濃加茂支局内)▼金子呑風氏(上田市)は陽疾患で静養中、毎日句帖を手にして作句の醍醐味に浸っていらる由。▼田口麦彦氏(熊本市)は一月十八日新春川柳大会で熊本市長杯を獲得された。▼浜田久米雄氏(岡山県)は二月十日付けて岡山県庶務助役に栄転された。▼国弘平休氏(山口県)は宇部駅長から山陽線厚狭駅長に栄転された。▼岸本木府氏(大阪市)は三月一日に「ますや柴漬」の店を西成区有楽町九で開店されることとなった。御繁栄を祈る。▼丸尾潮花氏(大阪市)は二月十日神原温泉に遊ばれ、満開の白梅の花と草花に正月以来の疲れを癒された。「妻連れて来たらと思う湯のにおい」▼勝谷山川児

スタートで
着心地のよい

O.S.K.の
レディースード

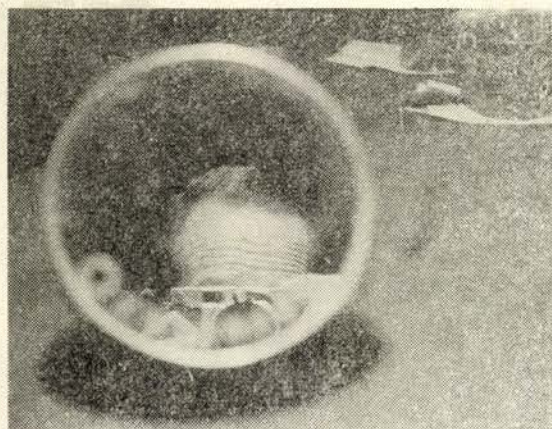
大坂商店
大阪東区本町一丁目二番地
電話(94)1745、1563

氏(松江市)は島根新聞の柳壇選者を担当されることとなった。▼伊藤泰弘氏(小松市)は二月一日石川県下川柳大会で第一位県議会議長賞を獲得され、同村虹要氏(石川県)は第四位賞を獲得された。▼西辻竹青氏(奈良県)は出勤途上約三週間の怪我をされ、目下宇陀郡室生村滝谷の自宅で静養されることとなった。▼野村初甫氏(神戸市)は一月二十六日職場の新年宴会で南紀白浜に遊ばれ、「露天風呂石を枕に月を見る」の句を寄せられた。▼植村客遊子氏(姫路市)は西大寺の会陽に行かれ、「神木追う裸裸のいきり」の句を寄せられた。

慶弔

▼万伸一進氏(小松市)は次男をもうけられ進さんと命名された。お祝い申し上げる。▼藤原重信氏

不朽の人々



岡山 聖 浜田 助役



(久米雄)

これはまぎれもない私の写真です。たしかこの時はすこし酒が入っていたはず、夜のちやぶ台の上にある鏡に写ったぼくのひたいのしわ、このしわは長命の相があるそうで易者が七十五才までは絶対に請合ってくれたもの。

しわ寄せて喜怒哀楽の来り去る

(出雲市) は一月二十六日に結婚され二月十三日に同氏宅で祝賀会が催された。▼板東千代美さん(大阪市) は二月三日華燭の典を挙げられた。お慶び申し上げる。▼川端鬼醉氏(羽曳野市) は二月十一日に節子さんを儲けられた、およろこび申し上げます。▼相原一善氏(岡山市) の母堂は二月五日死去された。年八十一。謹悼。▼高鷺聖純氏(大阪市) の義父一二殿は一月六日死去された。合掌。

▼内藤草一郎氏(ホノルル市) は二月二日出勤途上で輪禍に遭い死去された。葬儀は三日ウイロー社同人の手で盛大に営まれたが、ハワイでの異色ある作家を失ったことは淋しい限りである。謹んで哀悼申し上げます。

不朽洞

★常任理事会

一九五九年初春の常任理事会が一月二十六日午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院階上で開催。

会から

路郎、生々庵、文蝶、古方、いわを、好郎、多久志、水客、紫香の諸氏出席。左の事項を協議十一時散会した。

一、本社句会不朽洞選者決定の件
二、短詩文学連盟総会の件
三、前号二〇頁下段七面山氏原稿の件

路郎、腹乃、生々庵、文蝶、春巢各氏の五名で交替制にする。

一、本社句会会場変更の件
二、川柳指導の件
三、川柳まつりの件
四、副主幹、理事長、副理事長、柴、多久志、梅里の諸氏に企画委員を依頼し、川柳まつりに新機軸を出すこと。

の手によって、盛大に営まれ、古川氏司会、小生の弔辞、棺側もその他一切の御手伝いも皆我々の手でまし、恰もウイロー社々葬同様で故人もさぞ地下で喜んで居る事と思ひます。ホントに惜しい人を亡くし、之からあの異色ある彼の句に、お目にかかれなと思ひますと淋しい気がします。取急ぎ御知らせまで 勿々 二月四日

★前田伍健氏(松山忠より)

★常任理事会 二月二十一日午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院階上で開催。路郎、生々庵、文蝶、好郎、いわを、柴、多久志、春巢、没食子、恒明、潮花の諸氏出席。議案は川柳まつりの件、新句会場の準備の件、草一氏弔慰金の件、渉外事項等。

★新会員紹介

二月 河井 庸佑(大阪市) 正会員

三月 小島 さぎす(大阪市) 正会員

香林氏推薦

飛・燕・往・来

★築山快夢起氏(ホノルル市)より

突然ながら草一郎氏の長逝を御知らせ申します。詳細は同封の新聞記事にありますから省きますが、実は意外な変事で我々友人は大きな驚きとショックで呆然たる許り御葬儀は昨日ウイロー社同人

○申しおくれましたが「同舟近詠」やら「新川柳鑑賞」やらで御厚情をうけ感謝したり教えられたり悦んでいます。

○東野大八氏もよくやってくれました、有難い事です。大州市在住中でも快男子でした苦勞人です。

○路郎先生腹乃先生の御健康を常に陰ながら祈り上げています先ずは御礼まで

二月十六日

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 二月句会 (大阪市)

2月7日 午後6時

会場 光明寺

ながい間、本社句会のホームグラ
ンDとして親しまれてきたこの光明寺も、
この二月句会をもってサヨナラをするこ
とになった。おもえば庭園の一本の草木
にも哀惜の念禁じがたいものがあり、早
春の樹々のうすみどりを、薄暮の窓ぎわ
に寄ってあかず見入っている人もあつ
た。

三十五六年間使った雅号をサラリとす
てて、白柳子から白柳と改号された清水
白柳氏が登壇され二月の会が開かれた。

川柳の三要素を強調され「穿ち」「軽
み」「おかしき」をもつ次の句を例に
熱弁をふるわれた。本誌二月号の川柳塔
から、無鬼氏の二句目、故草一郎氏一句
目、花村氏二句目、茶仏氏二句目、清瀬
氏二句目、恒雄氏一句目、晃氏一句目、
どんたく氏一句目、東岸氏二句目、近作
柳樽から義流氏七句目、挽郎氏四句目、
不二子氏二句目、豊年氏四句目、濱川氏
三句目、矢寸志氏三句目、吉枝氏二句目。

ここで会場は、広間の衝立がスクリー
ンとなり、これからの三十分間であこが
れのフランス旅行とシヤれるのである。

池田正三画伯(二科会友)が、特に本
社のためご多忙のなかをさいて、ご自身
で撮ってこられたカラー写真を映写して
くださるのである。二千余枚のうちから

五・六十枚、川柳人向きのもの、たとえ
ば花の都フランスにもある露路裏とか、
関西流にいう昼店であるビストロの店と
か、興味深いスライドが、つぎつぎに美
術の香り高い画布となって会場を酔わす
のである。目に美術、耳に文学というこ
とはどうり、池田画伯の解説は美しい紀
行文を読むようであった。氏の「好意を
ここに厚く御礼申上げます。

兼題「物音」の披露にさきだつて路郎
主幹から、川柳の本社句会の会場が、三
月からネオンの花咲く道頓堀は文楽座別
館四階へ発展進出することを披露され
た。

かなしいことが一つ。ハワイ支部の重
鎮内藤幸一郎氏(維持会員)が二月二日
自動車事故の奇禍に遇い永眠されたこと
が主幹から報ぜられた。——哀悼。

二月句会は新しい柳人が相当数出席さ
れた。おなじみのない雅号を見ると句会
部はニコニコ顔である。

思い出の光明寺最後の不朽洞杯は不二
田一三夫氏の頭上に輝いた。(F)

出席者 一路郎・一三夫・芙路・圭井堂
・句念坊・由美・黙平・柳宏子・舟遊・
昌男・保美・す・む・摩太郎・三司・雄
声・水堂・薫風子・晃・榮・文秋・いさ
む・紫香・潮花・旅風・梅志・武助・兼

治郎・柳志・十悟・狂二・満秋・堰子・
葉乙女・文蝶・淡舟・弦月・多久志・牧
人・白柳・登志子・庸佑・井平・有岡・
光女・白水・好郎・月都・新石・直人・
与呂志・花村・梅里・蘭・静馬・南宗・
メ女・いわを・進之助・半歩・永断・繁
雄・宏子・葭乃

兼題「物音」 麻生路郎選

物音の玄関へ立てばチラシあり 悟朗
ぜいたくは温泉のせまぎが寝つかせず 香林
きみわるしお寺物音一つせず ちよ子
足音に追つかかれた夜のビル 参無子
物音も聞えず手術まだつづき 好郎
雪跳ねた竹が障子の影になり 有岡
物音に笑えぬコソの忘れもの 摩太郎
物音にふるえてバット持つて見る 句念坊
物音へ盲は膝の手を重ね 三司
コトコトとねずみの親子愛らしい 女
物音一つしない本堂不気味がり 庸佑
からだ中アンテナにしてホシをはら 保美
転宅の夜の物音へ不安わき 白水
朝刊の入りし音聞く床の中 喜仙
物音に耳すます程貯めて居す 文蝶
雪崩の音遠くに聞くも旅のこと 半歩
聞込みは物音一つなき刺客 梅里
物音におびえた妻に抱きつかれ 南宗
奥座敷臨終 近い音になり 好郎
頼りない夫を起こす夜の音 永断
物騒な物音がして寒くたれ 進之助
一切の物音消えて寝つかれず 生々庵
歩くのも物音になる 安普請 白柳
帰りにかけては居留守音を立て 花村
物音へばくち打つ手の慌てよう 蘭
物音は戻つたらしい 母の勘 柳志

物音に馴れ切っている子 沢山 白水
物音は何か隠した顔の色 堰子
一寝入りした頃母の路むミシン す・む
音も無く雪が汚濁の世を包み どんたく
一寝入りした頃風呂をおとす音 薫風子
バタバタの通つたあとが雪になり 失名
物音に慌てて出れば靴がなし 文秋
物音にボリス警棒持ちな おし 静馬
退院が近く物音気に成らず 与呂志
物音へおとなりまで飛んで来る 保美
物音へ動じぬ妻となつて 老け 満秋
ささ機嫌物音はみなリズムミカル 梅志
蜜柑食べてるの夜中に起きてくる 梅志
物音をたしかめる表情のかいこと 栗
音もせぬ勉強の灯へお茶を入れ 宏子
下婢起きる物音がして窓白らむ 半歩
物音に乳房はなした腫がきよろり 十悟
香音のそのまごこる帰り路 女
証人の聞いた物音皆違ひ 堰子
物音に線の細さを笑われる 梅里
うつうつへ二の糸切れたらしい音 阿茶
棺桶にもしやと思う音がして 一三夫

兼題「客種」 松江梅里選

客種の自慢おやじに歌が詠め 三司
客種にあわせる三味も炭坑節 花村
客種は三流半助だけで足り 句念坊
客種をやめた妓に引きぬかれ 潮花
客種も客種仲居も酔いつぶれ 生々庵
客種をなげき老妓の三味さびし 一三夫
客種の良きも権利として含み 永断
一現は断りますの門構え 三司
客種が落ちて老舗の名も廃れ 牧人
客種もするめが売れる三流館 一三夫
客種も学生さんで若返り 牧人

よいと見てかボン引きつきたとい 有岡
角帯で来て客種を自慢する 白柳
客種は途切れ屋台は飯にする 井平
客種はよし特役も久しぶり 梅志
常連と言う客種で貸しが出来 潮花
北浜のバーへ市況が直ぐ響き 牧人
客種が絶えて仲居のコンバクト 進之助
客種が違い協定保たれず 黙平
インテリと知る客種の蒸タオル 進之助
沖仲仕と言う客種もみなと町 陽子
みつ豆屋ここの路次へ折れ 梅志
地下足袋で来ておぼはんてんはやり 葉乙女
客種を見たか辻占素通りし 堰子
タクシーの客種知った流し 葉
客種に大人も交じる紙芝居 井平
庵丁が変り客種また変わり 由美
客種はいいが通訳はしいとこ 梅志
客種も此処で底つく釜ヶ崎 堰子
風呂敷が要るこの辺で売れる炭 黙平
客種を持つ娘を逆ひきぬかれ 梅里

兼題「不細工」 後藤梅志選

不細工な女いよいよビスになり 弦月
不細工なせたら落ちる棚をつり 柳志
不細工な嫁が一家をゆるがせず 見
不細工な妹の方が先に嫁き 女
不細工な癖に理屈の筋が立ち 永断
不細工の顔が高座を引きたたせ すむ
不細工な顔を気にして嫁き遅れ 南宗
不細工と自認して居るいじらしき 文蝶
不細工なところが民芸風ですな 花村
不細工な奴でと新婚嬉しそう 葉
不細工を舞台の裏で叱られる いわを
惚れられぬように母さん産んでくれ 昌男
不細工になつても昔のつりで居 阿茶
不細工な妻に子供はようなつき 梅志

兼題「姉妹」 黒川紫香選

お見合の日は妹を外へ出し どんたく
妹の学資を稼ぐ厚化粧 南宗
姉妹でらかなカラーにしたい 梅志
妹をはめれば姉が気に入らず 幽谷
アパルトも同じ姉妹とも二号 永断
ひと通り出来る姉の方売れ残り 梅里
姉妹が揃って結婚反対し 幽谷
姉妹の男性観が一致せず 有岡
ボーイフレンドを妹にみてもらい 十悟
姉はお茶妹は話しに米 紫香

席題「ホテル」 丸尾潮花選

母連れる旅はホテルを避けるなり いわを
フラッシュを浴びてホテルの玄関口 好郎
ホテルまで来たなら女の大胆な 好郎
何をやるかホテルを借り切つて 紫香
消燈もせずホテルの暗く 葉
新聞がドアの下からくるホテル 梅志
ホテルから出勤とは見えな女事務 舟遊
勧誘をしないとホテル室がなく 花村
宿屋からホテルに交える金を借り 堰子
内風呂もおますホテルのぬいぬい 生々庵
ホテルからの便りは妻をうらやませ 宏子
堂々とホテルに住んで籠抜けし 梅里
秘密もつてホテルの火が灯り 晃
踏み込んでみたがホテルは飛んだと 圭井堂
あまいなホテルで畳の部屋ばかり 十悟
ホテルとは名ばかり吸取式便所 多志
商用で泊るホテルの鍵が冷え 有岡
一寸した見栄でホテルの名に泊り 生々庵
浮気したホテルは遠く見て通り 文蝶
来て見れば地下足袋もあるホテルなり 柳志
女連れだからホテルもいやがらず 南宗
片手間のホテルが派手に儲けさせ 与呂志
ホテルにてドラッグが欲しい旅疲れ 白水

席題「遺伝」 佐野白水選

遺伝説三代つづく鬼瓦 三司
家系図へ遺伝のことはふれとらず 保美
血圧の高さ遺伝ですまされず いさむ
女の子生まれて色盲はつとする 庸佑
遺伝性の病気を知った恋の破目 進之助
獅子鼻も嬉し確かに吾が子なる 月都
遺伝でんなんと盃の手がふるえ 葉
メンデルの法則阿呆も数のうち 生々庵
両性の合意は遺伝など言わず 柳志
秀才の遺伝にされて気に入らず 柳志
遺伝でつかいにと大声ははからず 葉

色紙短冊
書畫用品

大坂戎屋

丹月堂

電中セニセニ

箱という遺伝へ暗い日を送り 淡 舟
 えんどうの花に遺伝を示される 庸 佑
 独身の老兄妹にある遺伝 一三夫
 メンデルの法則五男左利き 多 久 志
 見込まれて遺伝を称めたまふ嫁ぎ 梅 里
 遺伝学通りに俺に似た息子 圭 井 堂
 メンデルがどうであつたらうと添うもり 晃
 じいちゃんを血を引いたの字がきれい 満 秋
 遺言にやつと遺伝を知らされる 登 志 子
 相談欄遺伝をそつと聞き合わせ 柳 志
 秀才は嫁の遺伝にしてくれず 栗 榮
 劣性遺伝と彼もみとめたはしこ酒 摩 天 郎
 遺伝だと言うて今更どうする気 月 都
 遺伝が何ぞ二人の恋は火の如し 好 郎
 優生に遺伝もすると許可される 十 悟
 遺伝とは別に失意の胸を病み 好 郎
 もう僕で終る愛生園の月 好 郎
 果てるとも遺伝させたくない苦惱 多 久 志
 呪われた遺伝お遍路の杖 重 久 志

席題「菓子」 西村花村選

後口にお菓子が欲しい胃腸薬 南 宗
 気のおけぬ友は茶菓子を催促し 淡 舟
 片言で菓子屋の名前だけは言い 登 志 子
 孫に肩叩かす菓子も買つて置き 柳 志
 菓子くれるおじやんだからマも好き 満 秋
 客へ出す菓子を子供が睨んどり 晃
 孫つれて菓子屋の前を小走りし 句 念 坊
 お三時が待てぬお菓子が届りぬ 圭 井 堂
 遠足のお菓子が背にせがまれる 宏 子
 菓子をよくたべて断る気の見合 木 堂
 膳立ての音はしてたお菓子だけ 好 郎
 孫の菓子買つて風船買つて来る 静 馬
 女店員ケースの裏で菓子を食べ 月 都
 菓子だけで女同士の小半日

婦人会菓子買いにきた松屋町 一三夫
 まだポケットに生菓子の爪楊枝 白 柳
 ポケットの菓子がとさの役に立ち いさむ
 買い置き菓子にぬる子沢山 与 呂 志
 生菓子が干からびた旧家なり 舟 遊
 菓子折と並んで無沙汰記びてる 昌 男
 菓子折だけ帰るつもりが昼になり 好 郎
 去ぬ客をとめとめ菓子を包みかけ 紫 香
 お供えのように見合の菓子が 月 都
 菓子折を提げて表札見て歩き 晃
 菓子箱の中味は金庫へ収められ 一三夫
 (庸佑清記)

川 離 ハワイ支部句会 (ハワイ)
 築山快夢起報

核実験真の平和が疑われ 風 草
 旨過ぎる話本当かと念を押し 笑 流
 本当の事は互のために秘し 砂 丘
 本当を包まずに言う馬鹿が知れ 周 防
 金満家本当は一生楽でなし 平 八
 うっかりと本当を言つて首になり 揮 山
 本当は之れ之れと本音はき 紅 茶
 本当に出来そうもないホラを吹き 惠 津 子
 嘘を言い本当を言つて娘が売れる 旋 風
 姪っ子嫁本当に腰を据え 斧 平
 剣幕に本当言えず引きがかり 暁 舟
 惚れた振り本当は取ろう金取ろう 泉 本
 本当の京都を深る裏通り 銀 水
 幾つもある本当の詰問かされる 八 丁 堀
 本当の味は胡座の差向い 柳 葉
 本当が言えない義理の板挟み 浅 太
 本当にしよと女将とり合わず R 女
 本当が書けぬ日もあり日記帖 快 夢 起
 本当の苦勞世を知り親を知り 弦 月
 本当の席は事務所の隅の隅 魔 花 麗

本当のミンクは肩で睥睨し 舞 座
 本心と別な笑顔の美しさ 草 一 郎

川 離 にしなり支部句会 (大阪市)
 後藤梅志選

和泉野に風車が凍てている寒さ 晃
 アパートに男がひとり居る寒さ 満 秋
 土俵際しふとい腰がものを言い 柳 宏 子
 横綱に勝った土俵の砂けむり 雄 声
 初土俵親に見せたい上手投げ 柳 志
 嘘のない土俵天下の眼を集め 白 柳
 禁酒とは馬鹿にするなどはら 文 秋
 はらの虫ぐつと押える年となり 太 路
 どこでどう納めて来たか腹の虫 玲 人
 年頃の線が出て来た河童の娘 薫 風 子
 河童ふと出そうな池の猫柳 舟 遊
 膝抱いて寒く孤独の河童眠る 葉 光
 小糠雨河童ドボンと音を立て 牧 人
 賽銭へ気狂い沙汰の一万円 す 一 傘
 賽銭があたつて痛いと云えず 一 傘
 賽銭と一緒に飛んだ袂くそ 堀 子
 賽銭を上げぬ相手派手に打ち 旅 風
 雪積り雀賽銭箱のぞき 五 色
 賽銭をはりこんだのみにく凶 清 人
 賽銭はポケットの中で撰つて入れ 悟 朗
 子どものひざをわくわくはどいにおい 慎 太 郎
 膝に手を置いて読み札じつときき 庸 佑
 膝の上もう逃げたが知る知恵が 千 代 子
 川渡る娘は膝を気にし出し 三 舟
 可愛いと抱えて膝へこぼされる 蘭
 じいちゃんの膝でソファを読むときめ 歌 子
 きつちりと崩れ膝に過去を秘め 敏 子
 膝小僧抱いて明日ない人たむろ 十 悟
 膝に置く手が熱弁に動き出す 利 幸
 膝抱いて世の明暗の風を聴く 葉 平

小鼓の拍子とわかるあさが出来 梅 志

川 離 淀川支部句会 (大阪市)
 武部香林選

マフラーの柄世渡りのむつかし 文 児
 うしろからいびき聞える三本立 東 洋 男
 待つていた名画三本立で来る 尚 徳
 三本立の看板派手な町はずれ 若 菜
 花嫁を仕立てて母親涙ぐみ 全 信
 花嫁をゴーストで見るバスの客 礼 司
 花嫁の父はうろろするばかり 三 十 郎
 愛される嫁になる気の角隠し 木 堂
 社長殿漫画見るときだけ笑い 句 念 坊
 見画く河童世相を見逃がさず さき 子
 先生の漫画がノットへ出来上り 幽 谷
 兄の漫画取り上げババの小正月 灯 子
 一面の漫画となつて温泉につかり 香 林

川 離 阿倍野支部句会 (大阪市)
 金井文秋報

関東煮の屋台が並ぶ銀座裏 す 一 傘
 関東煮虚飾を捨てた顔が寄り 晃
 てるてる坊主からりと晴れた風にゆれ 堰 子

事務用品専門店
 事務用・文具・器機・什器

株式会社 心斎橋クニヤ

本店 心斎橋北詰 (23) 4740-1
 阪神店 阪神百貨店五階 (36) 1201

眼ばちこの痕まじないのあと 亜鈍
チンブイといふまじないはよく効き 唯義
調病誌ワラをもつかむおまじない 六童子
神鍋の雪へ元氣にころびに来 十悟
肌脱いで刺青元氣ありつ たけ やなぎ
ラジオ体操父の元氣を取り戻し 太路
捜査課の盲点について北更 笑み 一三天
税理士に聞くと盲点だらけなり 万案
何気なく突いた端歩が効いてくる 薫風子
簡単な盲点ベテラン見逃した 葉光
初めから飲み直す氣の飲みつ振り 繁雄
初めにはいかにも処女の素振りして 豆秋
新人は初手に毛じめを取つておき かず子
初めから組んだ芝居に引つかり 樹峰
初めが大事と新婚教えられ 庸佑
金ならばないと初めに釘をさし 文秋

川雑 玉造支部句会 (大阪市)
福をよぶ吉兆値切つて値切つて買 西出一栄報
無心だが抱かれる味をよく覚え 一栄
味の無い膳は子供の居ない夜 井平
早よプリンセス貰わね妹にひやかされ 清子
歴史ゆきさぶつて平民プリンセス 直人
一枚の賀状一べつよみがえり 文秋
学校で一番小さい子を案じ 貞旬朗
貧者の一灯ばかりで復興抄らず 登志子
墨色へ来て一の字がチトふるえ 柳宏子
白柳

川雑 京都支部句会 (京都市)
おばあさんの叫びはバスを止めている 田中鳥雀報
青年の群れいてうつろなる叫び 司郎
スリラーを臆病な子が最後まで 鳥雀
臆病な母の眼と合う父の居間 尚平

ぬけからののはなやかき壁に吊るさる 紫蘭
仮説の中の僕をはなやかにしとく 隙
華かな中に冷たき大理石 幸男
黒い肌専門の化粧品部の鏡 ゆきら
黒人にうらめしきものの白があり 親生
黒い子も育ち日本ようふくれ 真砂
初舞台黒人兵になる化粧 つる子
男湯に又父ちゃんの大笑い 白扇

川雑 下関支部句会 (下関市)
傷兵の白衣がひかる 寒い空 石川侃流洞報
寒空に七味が効いた鼻の汗 詩醇痴
勝ち越しへ拍手の数がさえて来る 九呂平
マラソンは拍手の壁を縫うて行き 四郎
万雷の拍手で舞台の幕があき 戌理智
足音を忍んで目かくしされる妻 侃流洞
足音はやっぱり母だと子が当てる 慈雨
能舞台父祖伝来のしこを踏み 木陽子
悪友のサインはキョウとやる手つき 吐泉
二次会へ悪友ばかり集つて来 吞喜坊
ちり捨場パタ屋がよれば金になり いたる
二ツ三ツ土蔵があつて聲を撰り 柳蛙
皇太子日本一の嫁を撰り 伊三男
娘の腹にあわてた親の善後策 司楼
善後策つきた焦りの顔で来る はなみ
うっとり夢を見ていた乗心地 嘉次
国道をフルスピードの乗心地 千里
試乗車のお世辞もまじる乗心地 蘇人
これぎりと言う引退を惜しまれる 電峰
大器晩成最後まで子を信じ 藤四郎
きらわれているのに最後までねばり 羅川
フラフープおさつこのけるのも忘れ 橘川
こう首も廻つて欲しいフラフープ 晃

川雑 鳥取支部句会 (鳥取市)
自慢して見せた時計が進んでい 河村日満選
元旦の初日は窓でおがんどき 月光
大廻りして見つかった無提灯 秀和
父ちゃんがかえらぬ駅に灯がついた 由多香
春の陽へ新芽自然を疑わず 辰春
お年玉妻へも出して春にする 徳波子
船の窓島がゆつくり位置を替え 八文銭
窓外は吹雪炬燵に丸うなり 星影
進退谷まつたとは金のこと 多可志
ストープを囲み遭難した話 茗人
お年玉呉れずに酔うてねて終い 法泉子
青い灯で進めと故郷の母に言い 遊星
窓あけて春の日射しと入れかえる 湖山
くつたくもく春の日へ背を丸め 八歩
真つ直ぐ進み不遇の中に居る 日満

川雑 倉敷支部句会 (倉敷市)
久し振り鹹を切つたのも忘れ 相原一善報
失言といきまぐ方がねじけとり 谷水
ファンから来る好物が喰いさげ 万古
結構な御意見ですとあしらわれ 一善
失言が酒一升で事が済み 麗水
心臓の鼓動へ血圧気にかかり 風の子
意見どうりにしてもやっぱり失敗し 銀子
猪の信念雑音へ耳かささず 素身郎
森繁のファンで話のわかる父 狂風
何時間かファンの波に僕も居た 鈴ん坊
そこんとこ心臓だけと背をつかれ 真奇
勘定も人任せとは恐れ入り 隆文
二人きりになって心臓さわぎ出し 香春
人任せそれでも信用してはいず 陽子
一舜

品質優良
先カペン
TACHIKAWA PEN
大坂市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

タチカワビン
タチカワゼム
タチカワ画紙

久し振り洋画のように抱きつけず 創七
人任せしても急所は押えとき 萌芽
ファンとは茶碗の寸法までも聞き 春也
お目出たい密失言も聞き流し 美音子

川雑 備前支部句会 (岡山県)
盆栽をもらい手入れもきいてくる 三村柳風子報
盆栽は思うところへ芽を伸ばし 陽子
盆栽を飾り春待つ部屋にする 柳風子
じり貧を知られ番付からおちる 無名女
横綱にされて名譽にならぬ酒 自娘句
ライバルと番付仲良く並べられ 智恵美
呑んべえの横綱だからあなどられ 三六
腹が立ちますと息子の金使い 昌昌
ドラ息子位牌の前で意見され 伊久野
嫁が来てからの息子が他人めき 美音子
さいそくの無い借金をは年を越し 流風
大言を無口が笑う部落会 幸仙

二日酔大言はいたのを悔み 東岸
十二月地獄の底のように見え 清春
税務吏が来て大言が消えちまい 承平
大吉を誰かに話す歩を早め 久米雄
アパートの窓で盆栽春を告げ 浄美
番付に乗って張り切る宮相撲 竜泉
三人の息子へ親の気がゆるみ 正州
さいそくの笑顔に笑顔で払つき 一声
へそくりを溜めて一人で悦に入り はるえ
酔うたのが一人来ているにぎやかき あやめ

川維 広島支部句会 (広島市)

平田越舟報

かくし芸やと落まれば酒がせめ 越舟
台所のエブロン借りるかくし芸 十進
とつときの十八番で座をわかせ うしを
かくし芸わたしは若いロカビリイ 麦秋
かくし芸出尽した頃酒が切れ 弓路
太宰府のスタンブ梅が匂うよう 木公
心境も知らずに今宵かくし芸 上利
職場でのあのむつりが聞かす喉 ときを
印一貫うに三押九押し 寅象
スタンブで居ろさがす捜査網 寛水
かくし芸出る頃一人二人消え 俊見
ダム出来た村にスタンブある茶店 仏々
かくし芸番の廻ったあわてよう 自然

川維 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平報

今置いた鉛筆探す飽屑 光郎
メングループ不満があつて筆が立ち 酔羊
母からの便り鉛筆書きでくる 恒雄
十等は鉛筆空くじ無して売り 金仏
鉛筆にちと忍濃な抽籤場 久雄
重大ニュースえんぴつどこへいた 味平

川維 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

二日酔いつか風邪気と化けている 楠原
味噌汁がほしいホテルの二日酔 幸夫
二日酔済まぬ済まぬと朝を寝る 鶴丸
和服着た母アルバムに生きて在り 駄句案
追羽根へ晴着の袂重たすぎ 榊原
かるた会和服の衣装くらべする 明暗
生き写し和服姿の娘も二十 鶴丸
あの夢の続きが見たい寝正月 冬樹
初夢の縁起日記に書く若さ 明朗
二日酔苦しさ瓶を見るもいや 鶏声

川維 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

夢があるから人生また楽し 豊年
松三日養子遠慮の要らぬ酒 青山
正妻を夢見て日陰の長いこと 天作
反省をした夜は父の夢を見る 丸平
人任せ赤字になって引つがれ 半休
松三日日記をためて酔うて寝る 同
松三日もう女房ともめて居り 箔川
旅の朝しかと東をたしかめる 六花
松三日次から次に来て荒らし 六花
初夢に乞食は食べるそこでさめ 千里
棟上げの酒は一升瓶でつき 弘道
まあ飲めと親父が酔いだ松三日 同
今年こそはと今年も拝む初日の出 夷男
鐘一つ歌手希望など捨てて鳴り 同
美容院日の出とともに寝正月 月明

川維 小松支部句会 (小松市)

伊藤茶仏報

不景気だと売出しの声録音でくる 白黎

売出してきたが雌伏の二十年 雅城
売出しの幟吹雪に堪えている とし樹
神様を笑わしてくる赤い顔 たつ路
化粧箱荒して赤い顔が逃げ 生風
ふり向けば真赤な顔にどなられる 城南
金策につきた日からの日記伏せ 味平
雪日記大根の値も書き留める 魚山
先生も迷う子供のうちまいうそ 茶仏
温情に甘えて一歩から初め 茶の香
熱帯魚吹雪も知らず藻をくぐり やすえ
味自慢亭主自ら鍋を持ち 千太郎
鍋でたく御飯の味も新世帯 若浪
鍋底の景気一万円の札があり 光威智
娘は柄で母は値段でまだ迷い 宗太郎
どてら着て夫婦向きあうくら鍋 幸路楼
大鍋の雑煮一家が空けた幸 一進
人の世の温みにふれた慈善鍋 三思楼
ボーナスが出たらほんのり赤い顔 多恵子
ふみ切れぬ気持も現ナマ揃えられ 吉枝
まだ心定らず親をてこずらせ 義風
赤い顔せぬと花嫁喋られる 芳朗

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼選

猪も廻り道した電気棚 ゆたか
猪狩りのベテランの田も荒らされる ふみ子
猪の恋は千里もつつ走り 越山
猪の仔の中にもろまなのも混り 一雨
大猪を射止め御輿のようにかき しげ子
霧サツと晴れて猪あわてさせ ひか平
牙があるので猪の絵かきと思ひ 無鬼
二歩三歩歩いて笑いお手も振り 栗斗
笑ってと笑わしといて撮る写真 弥栄
夫の留守 笑い笑しむ春を待ち ふで子
思春期へ一人が笑えば皆笑い 静代

世に知られ始め笑顔がうまくなり 白猫児
大臣になった笑いが写される 一雨
お茶だけで笑いころげる婦人会 秋月
自他共に許す美人で笑わない 文平
父さんが笑えば二階まで響き はつゑ
ミツチーの笑顔で明ける国の春 澄代
おてんばにちと重すぎる高島田 小菊
高島田ふだん出さない声で訪い 美千代
百姓はせぬ約束の 高島田 万世
高島田が出て来てチツプが気になり 一朗
式場で島田同志がくらべられ まさ子
高島田合わせて晴れの日も近し 初穂
高島田噂の人を連れ歩き 永断
石段となつて棲繰る 高島田 二山
ユーモアも入れて挨拶流石なり 枝葉
挨拶が長くて酒のかんがさめ とみえ
挨拶を母にニタ度促され みのる
挨拶で早一通話すんじまい 喜天
挨拶が下手で上役から離れ 凡志

川維 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選

乙女心は孤独夕日の長い影 銀子
真珠の歯こぼして惜みなき乙女 賤女
セーラー服へ格好つかぬ乳が張る 周甫
満月に祈る乙女の細い肩 山茶花
催促にいつも決った愚痴を述べ 壽子
呉れるまで坊や催促あきらめず 一草
催促に来たなと思ふ 給料日 たつよ
催促の無い借金が気にかかり 薄仙
催促をされて催促して廻り 知恵美
仏壇は催促せぬで花が枯れ 竜児
夕焼に秋刀魚の煙立つ我が家 句念坊
夕焼けへ背中を向けている別れ ちとせ

夕焼けへ娘と父の背が丸い
夕焼けへ妻の笑顔が笑いかけ
アベックで歩いただけの片思い
今少し歩きましようかと月の道
ブラトウクラブただ歩くだけ
七面山

川維 高知支部句会 (高知市)

川竹松風報

どん底の生活義理は捨てられず
どん底で気になる妻の多産系
どん底の暮しと見えぬ子の笑顔
どん底の底はないよとなだめられ
どん底の父を信じて疑わず
どん底を出直す僕に妻があり
母子寮の火事へ匿名寄附が来る
御近所の火事へ体がふるえて来
ていさいも兼ねた雑誌を持って
心配があるのに雑誌読む男
テレビに出て来た笑顔次期候補
ボナナスはボケツのれんを肩で押
ボナナスの不平を酒で話し合い
予告篇ベッドシーンを一寸見せ
寝室の調度はすべて君まかせ
寝室の姿寝室へ来て転び
寝室へ来て寝室の顔になり
母の気に入って寝る部屋温し
初笑い大人は下手なフラフープ
ボナナスが恋へ拍車をかけてくれ
最底のくらしの中の夫婦愛
寝そべって又読み直す古雑誌
蘇水

杏林川柳会 (大阪市)

麻生路郎選

はったりが実力よりもうわまわり
お家さんの人情予算に入れて
実力を買いがぶられて辛度がり
実力の差とは内心不服なり
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
小石

人情にもろいところへつけこまれ
御先祖がどうあろうとも腕次第
人情が白衣の前をさけてゆき
人情家外妻にそっけなし
サーピスを逆うらみする二日酔
二日酔母と女房の意見割れ
迎え酒未だ呑む気なり案を練る
戦後派へ人の情が仇となり
我利我利で人の情もふみにじり
実力があつたのか東大へ入学し
二日酔またかまたかではつとれ
ハイボール調子にのつて二日酔
御先祖にすまぬと母の一途なる
二日酔からせぬ朝の水の味
せちがらさ俺の実力買いにこず
二日酔うちの座敷でない障子
実力はこれ以上だと言いたそう
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
路郎

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

いのししのニッパケムで社のホーク
猪の回らぬ首や我に似て
向う見ず亥年でつかと尋ねられ
いのししを見たいと子等にせがまる
猪のなりてで揉める楽屋裏
盲点を秘書に聴いてる初対面
盲点を突く心臓になりきれず
花嫁のドレス畳のチリを掃き
待っている窓だけ明い団地の夜
窓灯り次々消えて寂静か
ウインドのホネを想えど身にあらず
乾益が合図で心の窓開き
裏窓にマダムの素顔パー休み
盲点をついて一躍男あけ
そこいらに盲点がある演説案
盲点をつかれて汚職どろを吐き
税務所の盲点探す本を読み
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
宏子

売春の盲点街角で息をつぐ
いのししも出たとおやじの語り草
村長のしし射とめたを三度聞き
路郎

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

聖なる夜パーティー券を余し
感謝する心は雨もありがたく
クリスマス七面鳥は覚悟決め
やつれてる方がたんまり貯めて
乗越して急行電車が恨めしく
乗越して恋はだんだんもつて来
乗越しが集合時間おくれさせ
一駅を乗越し山の湯につかり
乗越しにおつれがあつた終電車
乗越しの十四こんな手間が要り
乗越しの駅へ戻れば灯も消えて
乗越したとこでヒントが一つ湧き
ふと覚めりや元の難波へ戻つた
留置き電車で乗越また眠り
年末を君も乗越しかと笑い
乗越してこの名所を見て帰り
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
路郎

川維 婦人友の会総会 (大阪市)

一 新春句会 (三才前月号発表)

鳥籠を提げて初孫見に出かけ
終日を小鳥ながめてみんな留守
神主の衣服もさえて初天神
初天神ここへも恋をたのんどき
初天神天神橋へつづく列
午後五時に似た人生のふと寂し
中村君五時前にも消えていた
朝刊を待つ老人へ五時が来ず
日曜も出勤する子あり五時に起き
五時からの好取組にわくテレビ
灯をけ五時には帰る子へ起き
五時から五時の時間が合はね娘の帰る
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
若菜

託児所で五時には帰る母を待ち
人形にははすり寄せて文五郎
家中の人形を持って娘が嫁ぎ
まばたきで人とわかつた菊人形
米客へ箸紙の墨乾いてず
箸紙をいじりたくなる長話
箸紙で灰皿山にして帰えり
箸紙を折ってつましそうな客
箸紙へ家柄という墨の色
箸紙の順に元旦坐られ
箸紙が二つ芝生の風に舞い
知恵美

たけるべ川柳会 (岡山県)

野々口美舟報

嘆じつとこらえて聞いている嫉妬
嘆込んだ祖父の背中の中のこと
嘆一つするにも嫁は気を使い
言いにくい返事明日にのぼしとき
かけ出しの記者に特ダネしてやられ
口返答痛い所を突いて来る
密談へ一寸気をおく嘆払い
火事見舞古着を記びるように出し
嘆払して満場へ笑いかけ
美舟

鮎と料理と酒

アベノ橋地下映画食通街

千日前 大劇裏

梅里の店

大萬

★大万川柳(第九十七回)を募る

兼題「盛り場」 路郎先生選

締切・三月十五日 毎週五巻以内

発表・三月廿一日 (店内掲示)

投句は 阿倍野区松崎町三丁目 大万川柳会宛





セツト法善寺小路を見学する

(左から) 栗・多久志・路郎・安子・文蔵

某月某日、柳友日を職場に訪ねたら、あんなてんぷらを喰べますかと言って、北の新天地のてんぷら屋へ案内して呉れた。

「炭者はいらんぜ」と言っ、私には日本酒、彼はビールをあおりながら、いろんな話をした。

「あんな病氣って、どんな病氣でしたん？」

「睡眠不足と疲労が積み重なって中脳がケイレンをおこしたんだそう。病名は失語症、失書症と言って、一語も談せなくなるし、家内が紙と鉛筆を持って来たが、意思表示が出来ない。食欲をうったえるために、「カ」と片仮名を一字書いた。次に「ユ」と書いたつもりが「エ」と書いたので家内には意味が通じない。これはいかんと思って書き直したら「コ」と書いたので矢張り通じない。最後に

「粥」という漢字を一字書いたら、「ああ、おなかが空いてんのやわ」と、ヤツと意思が通じた。

これで見ると片仮名は中脳の受持で、漢字は大脳の受持だといえそうだがなるほどそうかも知れない。

「あなたが変ってるから、病氣まで変ってまんのやな。」

「今でこそ、斯うして、喋べれるし、書けるようになったが、その時は全く廃人同様だから、自決するより仕方がないと思った。」

「よう癒りましたなア。」

「医者も奇蹟だと談されていた。この頃のことを詳しく書き残しておきたいとは思っているが、今はまだ、その時期でないから、これぐらいにしとこう」と言っ外談に移った。

某月某日と言ってもごく最近、

宝塚映画製作所で見学山柳会を催した。ご承知のように、映画人の仕事は労働基準法にはあてはまらない。夜の十時から徹夜でやったりすることもあるので、よほどうまくぶつつからぬと見られない。私達が行って、しばらくしてからアチャコ出演の一コマを見ることが出来た。アチャコがむずかしい顔をしているのはじめて見ましたという人もいた。こんなことで、まあ、まあ、見学会のかっこうがついた。カットは映画「花のれん」に使った法善寺小路のセットであるが、明治生れの私達には全く郷愁を覚えさせるものがあつた。今度作る大阪ものの映画も、このセットを使うのであるから、この映画を見たら、おそらく私達

も、この映画に出演しているような錯覚をおこすかも知れない。

あちら、こちらとセットを見て歩いてるうちに、ホンマ物までがセットに見えたり、セットがホンマ物に見えたりした。尤も写真に撮ればセット街であるが、裏から見ると、中は全然ガラランドウである。

私はいつも、いのちある句を創れと言っているが、うっかりすると、セットのような形ばかりで中味のない句を作っているかも知れない。その点を絶えず反省すべきであろう。セットのガラランドウは別として、映画に出演する人達や、映画を撮影する人達が、タッタ一コマの撮影にも、繰り返えし、繰り返えし、何回でもやり直

しているのを見ると、見ている方が却って疲れるくらいである。斯うした映画人の努力は私達の山柳創作にも共通した悩みでもあり又なさねばならぬものであると言えよう。

清 酒



灘・魚崎

大塚合名会社釀

青ペン・赤ペン

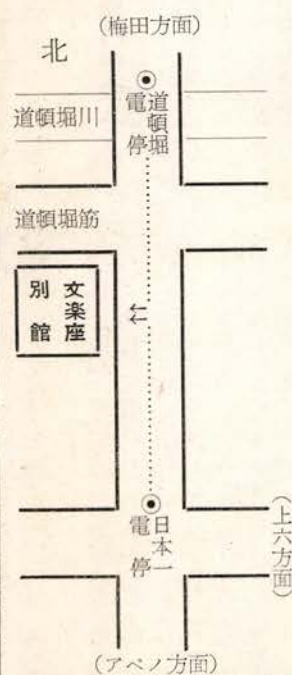
▼二月なかばにして、南信に梅の満開、北信にスキー不可能という暖かさ。おかげで徹夜が楽だったことはありがた。印刷所がモタついてこの徹夜がムタになるのが残念である。▼柳歴の古い人には今さら「入選の条件」でもある

まいが「川柳道徳教育講座」ともいうべきものを真し(塾)な気持ちで企画した。▼宝塚映画の川柳ルポの記事には新聞社なみのスピード編集だった。校正の最中だったのでちょっと疲れた。▼ハワイ

の故草一郎氏の悲しい事故は次号でハワイの人たちの記事と共に発表することにした。▼本社の句会が道頓堀文楽座別館四階へ進出する。左に略図を書いたがふるって

ご出席願います。▼高鷲亜鈍氏にご無理ねがった原稿や、森下冬青氏の好読物は四月号を飾っていたことにした。

(一三六)



所題時 26日(木)六時 南海電鉄句会 ソランマンカー・参考書・会計 難波高架下 親和クラブ	所題時 19日(木)六時 にしなり句会 春・コンビ・裏切り 西皿池町一 自民党西成支部	所題時 18日(木)六時 阿倍野句会 天狗・地下・人出 旭町二丁目 金塚会館	所題時 15日(日)一時 明和研究句会 影・落第・跡継ぎ 西宮市鳴尾町 新明和興業KK	所題時 12日(木)六時 333句会 別れ・しづちゃん・口先 堺市老松町三丁目島野工業KK	所題時 10日(火)六時 みおつくし句会 御成婚・おほろ月・素足 天王寺小学校	所題時 10日(火)七時 玉造句会 邪魔・手ぶら・欠点 市電玉造電停南五〇米 大阪信用金庫	所題時 3日(火)六時 淀川句会 夜中・じゃんけん・けちゃんば 十三西之町五丁目東淀川郵便局
所題時 弓削句会 坂・草笛・雀・椿 久米郡久米南町下弓削四五四 直原七面山居	所題時 杖・尻・福 未定	所題時 16日(月)夕 京都句会 〇・白・煙 四條繩手仲源寺	所題時 14日(土)六時 備前句会 灰・根・空腹・腰・あこ 浜田久米雄居	所題時 8日(日)一時 米子句会 家出・油断・けむり・捨てる 米子市公会堂 日本間	所題時 8日(日)一時 倉敷句会 香水・花・旅・蚊 倉敷市水原弥生町四ノ三一 相原一善居	所題時 8日(日)一時 宇部句会 ひな・出馬・転宅 宇部市港町 国鉄職員会館	所題時 1日(日)六時 小松句会 雛祭・乾く・雛鉢 小松市大和町 伊藤茶仏居

世界の驚異博

3月20日～5月31日 主催 朝日新聞社

ワンダフル・フェア



主な施設と内容

野外大パノラマ
バルテノン、ピラミッドとスフィンクス、万里の長城、マドゥラ、エンパイア・ステート・ビル
世界の驚異館
ピクトリア池、ランド・キャニオン、フーバーダム、ベントゴッソ、人工惑星サード、エベレスト、聖ミカエル山、アンゴルド・ワグト、ボタラ宮殿、エルサレム、バグダッド、タジ・マハル他
自然動物園 自然水族館
自然スポート 野外劇場

みさき公園駅下車 なんばから145円

みさき公園

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます
一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です
高島屋

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四

高島屋

printed in Japan

募集

課題吟募集

急所 (十句以内) 中島生々庵選
女同 (十句以内) 福田妄夢選
声 (十句以内) 那谷光郎選
青葉 (十句以内) 西尾 栗選
招待 (十句以内) 吾郷玲人選
雨漏り (十句以内) 中村 九呂平選
(三月十五日締切)

毎号募集

近作柳樽 (雑誌廿句以内) 麻生路郎選
川柳塔 (雑誌十句以内) 北川春葉選
文 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選
章 (初月十五日締切)

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
▼ 「川柳塔」の投稿は不朽詞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第三十四年
定価 六〇円
(送料四円)

(禁轉載)
半カ年 三三四円
一カ年 七二〇円
昭和三十三年二月廿五日印刷
昭和三十四年三月一日発行
大阪市住吉区西五丁目二番地
編集長 麻生幸二郎
行印刷人 麻生幸二郎

発行所 川柳雑誌社
電話 大阪 六〇八一
神戸 四七五〇

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿四年三月一日発行(毎月一回一日発行)

編集 兼 発行印刷人

生や二郎

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区西本町二丁目五番地 電話大阪六〇八一

郵政口庫大阪七五〇五〇番

定価六十円(送料別)

不眠 昼間療法!



日中のイライラもすぐとれる

昼間の服用だけで、夜自然に安眠
ができ、日中のイライラや不安感
もとれ、明朗・能率的な生活を送
れる習慣性のない安全な新薬です
スッキリした頭で作句の為に!

晝はすつきり・夜はぐつすり
ノクタン錠

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

2つのスピーカーの 新しいスタイル



世界へ技術の道を歩む

14型 F10 12チャンネル
超遠距離用 イヤホン装置付
現金 正価 **62,500円**
(専用の木製台1,300円)
1 年の品質保証書つき
三洋電機株式会社



みんなが着て
みんなに
喜ばれている

倉敷
ビニロン
学生服

学生服用として特
別につくられた丈
夫で着心地のよい
ビニロンが使つて
あります

倉敷レイヨン株式会社



文部省・通産省推奨の純国産合成繊維

一家そろってホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ④551-2